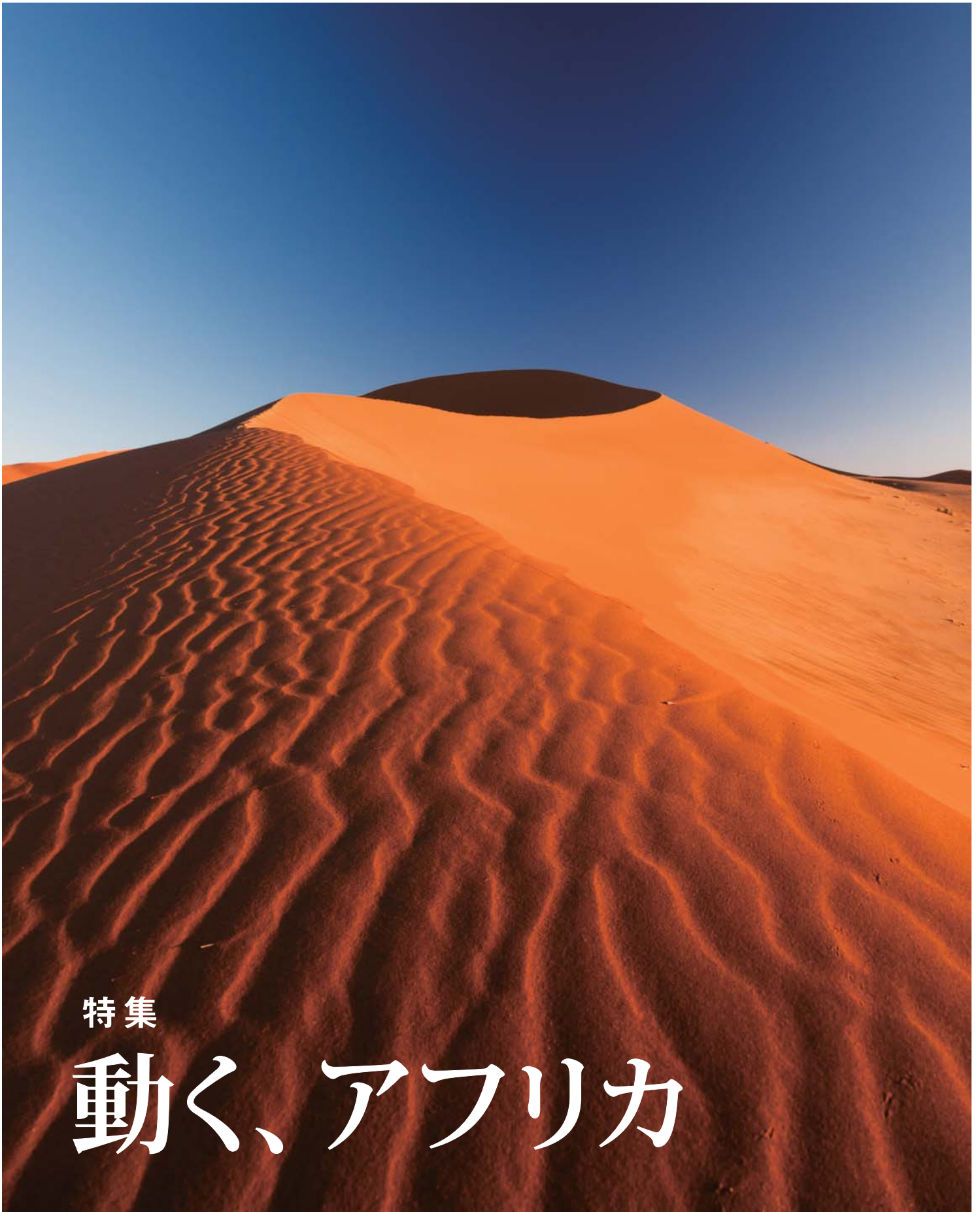


mundi



[ムンディ]

2015 February No.17 **2**



特集

動く、アフリカ

伝統という室

Laos ラオス

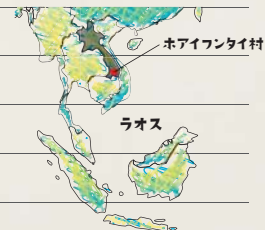


「とても上手に織るね」。そう話し掛けると、姉妹は恥ずかしそうにしながらも少し得意げに布を織り続けた。ラオス南部、ホアイフンタイ村で暮らすカトゥー族の女性は、7歳になると母親から先祖代々伝わる織り物を習うそうだ。

ラオスは50ほどの民族が暮らす多民族国家だ。近年の急速な発展に比例するように少数民族の伝統が失われつつあるが、この村の人々は、織り物の伝統を大切に守り続けている。

ある日本企業がその手先の器用さに引かれ、輸出用に量産品の製造を委託しようとしたことがあるが、村の会議でその話は断るようになった。村長はこう言った。

「企業の仕事を請け負えば安定したお金をもらえるが、私たちの誇りである伝統の織り方ができなくなる。この技術は私たちの存在意義なんだ。それがなくなるのは何よりも辛いことだ」。私はまた、ラオスが好きになった。



撮影：丸山陽平（ラオス／青年海外協力隊）

あなたの作品募集中！

「my photo」では、あなたが撮影した写真を募集しています。貧困や環境問題などをテーマにした写真、国内外問わず国際協力の最前線で活動に励む日本人や開発途上国の人の姿、テレビや新聞ではなかなか報じられない土地の風景や人々の暮らしなど、国際協力や途上国を身近に感じられる写真を、撮影時のエピソードを添えてご応募ください。応募作品の中から毎号1枚、本コーナーで紹介させていただきます。

応募条件 ①応募者本人が撮影した作品に限ります。②被写体に関する肖像権は、応募者の責任において了解が得られているものとします。③写真は、解像度が300万画素以上(目安)で撮影されていること、また画像の記録形式はJPEGを推奨します。

応募方法 お名前、連絡先(電話番号とEメール)、エピソード(300~350字)、記名の可否をご記入の上、写真とともに応募先アドレスまでEメールでお送りください。
*応募作品は本コーナーの他に、事前確認の上でJICAの広報活動に活用させていただく場合があります。*ご記入いただいた個人情報はこちら以外の目的では使用いたしません。また、応募作品はご返却いたしませんので、あらかじめご了承ください。

応募／問い合わせ先

jica-photo@idj.co.jp

(『mundi』編集部宛)

「mundi」はラテン語で“世界”。開発途上国の現状や、現場で活動する人々の姿を紹介するJICA広報誌です。

02 my photo 伝統という宝 ラオス

04 特集 動く、アフリカ

データで見るアフリカの課題
若者が職で輝ける力を ウガンダ
西アフリカを一つに ブルキナファソ & トーゴ
地域で命を支えるために ナイジェリア
アフリカの未来のために ~産業を支える人づくり~



18 PLAYERS 心のケアで輝く一人一人の命 ニバルレキレ ~I am special!~

20 JICA Volunteer Story 三上 志保 青年海外協力隊/ガーナ/農畜産物加工

22 世界とつながる教室 足元を見つめ、 未来につながる授業を

沖縄県立陽明高等学校



24 JICA STAFF 田口 晋平 JICA南スーダン事務所

25 JICA UPDATE

26 ココシリ 「ここが知りたい」 いろんなトピックを分かりやすく解説!

28 Voice 久野 武志 カメラマン

30 地球ギャラリー ウガンダ 学びの明かり



37 イチオシ! 本・映画・イベント

39 MONO語り カラフルな刺しゅうで収入アップ!

40 私のなんとかしなきゃ! たかまつ なな お笑い芸人



JICAのビジョン

すべての人々が恩恵を受ける、
ダイナミックな開発を進めます

Inclusive and Dynamic Development

表紙
撮影：鈴木革

アフリカ南西部のナミビアのナミブ砂漠。青い空と赤い土のコントラストが美しい。2013年にユネスコの世界遺産に指定された



アフリカ地域全体で 立ち上がる

2001年、NEPADは「アフリカ開発のための新パートナーシップ (New Partnership for Africa's Development)」として、誕生しました。目指したのは、アフリカ大陸の国々が丸となってパートナーシップを組み、貧困撲滅、持続可能な成長と開発、政治経済のグローバル化、女性の社会進出などを目指していくこと。国際社会の支援だけに依存するのではなく、民間資金も活用しながら自力で発展していくという動きです。

そして今、NEPADでアフリカの指導者たちが今後のビジョンと行動を検討しているのが「AGENDA 2063」です。50年後を見据えた開発目標ですが、これは「計画」ではありません。そんなに先の未来がどうなっているか、誰も予想できるはずがない。しかし、私たちはこれまでの50年に学ぶことはできるはず、学ぶべきだと考えています。

アフリカは多くの国が独立し始めた1960年代から、それぞれの国で「政治的自立」に力を注ぎ、ある程度の成果を得ました。それを踏まえ、これからの50年で目指すべきは「政治経済の変革」です。

商品の付加価値の向上、産業化を進め、包括的な成長を遂げていかなければなりません。今年中には、「AGENDA 2063」はアフリカ連合(AU)のサミットで正式に採択される見込みです。NEPADはAUの開発部門として、国レベル、地域レベルで、これを実現していく役割を担っていくのです。

かつては“暗黒大陸”ともいわれたアフリカ。
その地域が今、目覚ましい経済成長を遂げている。
さらなる発展のために、彼らはどのような道を歩むのか。
アフリカの地域統合を支える組織、NEPAD*の
イブラヒム・アサネ・マヤキ計画調整庁長官に聞いた。

* アフリカ開発のための新パートナーシップ (New Partnership for Africa's Development) の略称。

特集

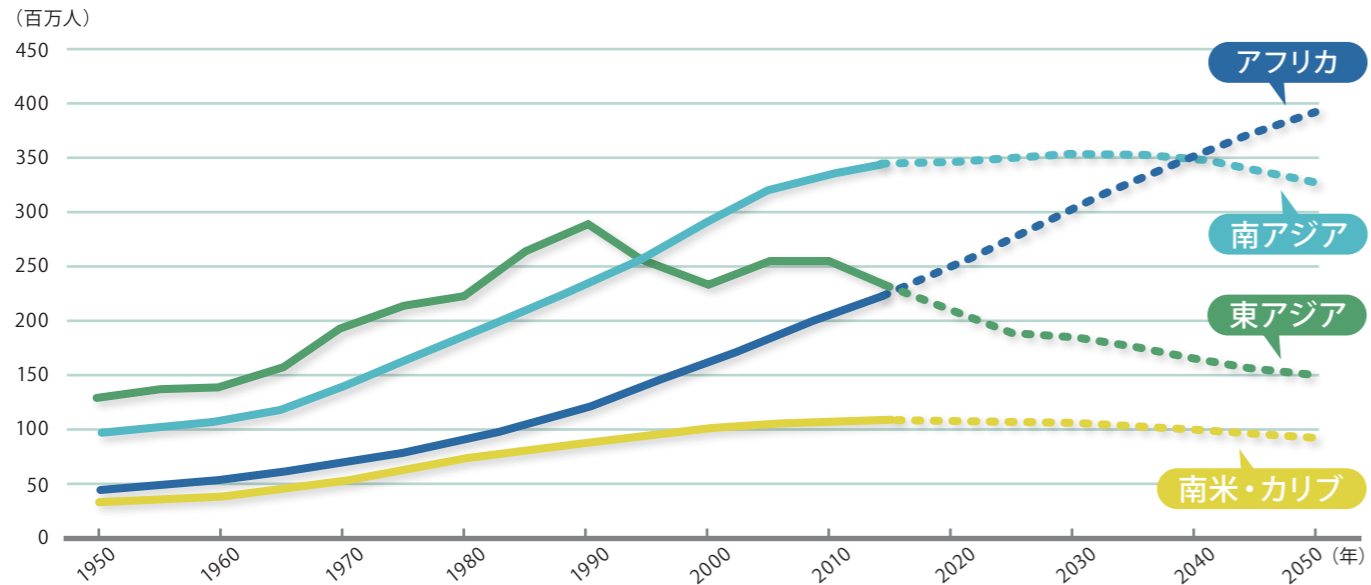
動く、アフリカ

アフリカのポテンシャルとは？

若者（15～24歳）の人口が増える！

出典：JICA「アフリカの若者に明るい未来を TICAD Vへの報告書」

■ 若年層の人口変化

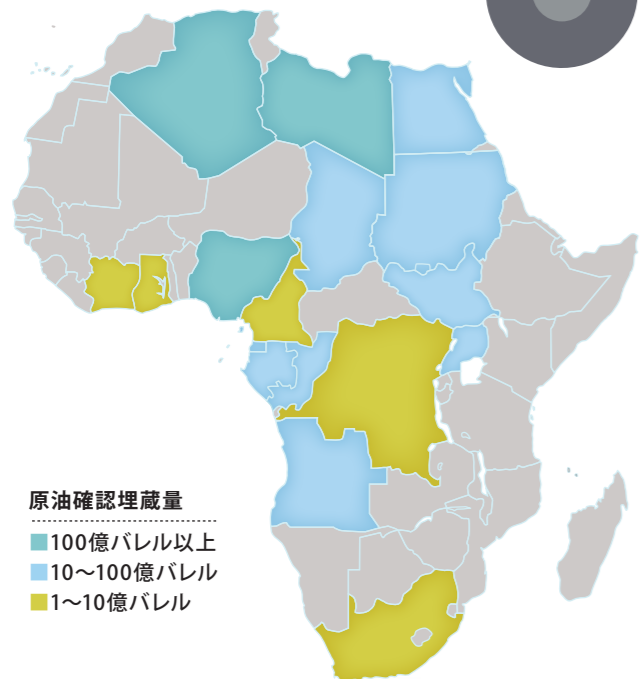
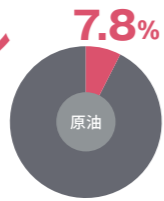


天然資源の宝庫！

出典：JOGMECのデータを基にJICAで作成

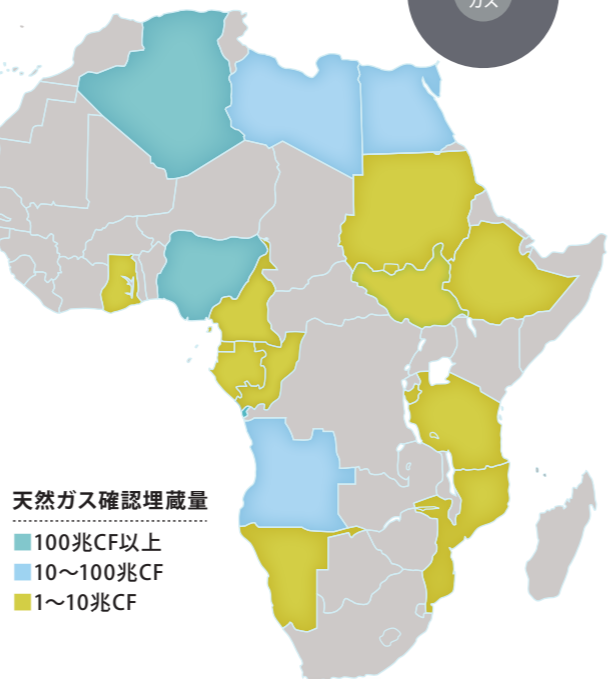
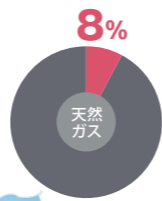
■ 原油確認埋蔵量 (2012)

アフリカ | **1,300億バレル** (7.8%)
世界 | 1兆6,680億バレル



■ 天然ガス確認埋蔵量 (2012)

アフリカ | **14.5兆m³** (8%)
世界 | 187.3兆m³



未来の成長に向けて、今の課題と向き合う

「AGENDA 2063」を実行する上で、アフリカはさまざまな壁に直面しています。一つが人口構造の変化です。近年、アフリカでは若年層の人口増加が顕著ですが、これから、さらに加速化すると予想されています。そこで問題となっているのが雇用の確保であり、そのためには産業の活性化が必要となります。そして2つ目は、天然資源のガバナンスです。アフリカは天然資源の宝庫といわれていますが、それをどのように産業の活性化につなげていくか。国として、地域として、きちんと政策をつくらなければなりません。2014年は、アフリカにとって苦難の年でした。その原因が、日本でも連日報道されていたエボラ出血熱の流行です。西アフリカを中心に混乱に見舞われ、今もお、その影響は続いています。ここで私たちが学んだのは、繰り返しになりますが、アフリカが目指すべき成長は包括的でなければなりません。



タンザニアでは、日本ならではの5Sを取り入れた病院運営を日本人専門家が指導



ガーナでエボラ出血熱の感染防止に向けた啓発活動を行う青年海外協力隊

特集 動く、アフリカ

ばならないということです。例えば、感染国の一つのシエラレオネは、近年高い成長率でその名を轟かせてきましたが、エボラ出血熱の流行を早期に抑えることができませんでした。それは、その成長が公共衛生システムへの投資につながっていないからです。それが明らかになった今、本当の意味での成長を遂げるためには、人的資本への投資が必要不可欠なのです。さらに、シエラレオネ、リベリアなどの紛争終結国はまだ国としてせいぜい弱な部分が多くあるため、このような不測の事態に備えて、制度をきちんと構築しなければなりません。国境を超えて広がる感染症は、言うまでもなく、国単位で解決できるものではありません。アフリカ全体として、広域で戦略的に対

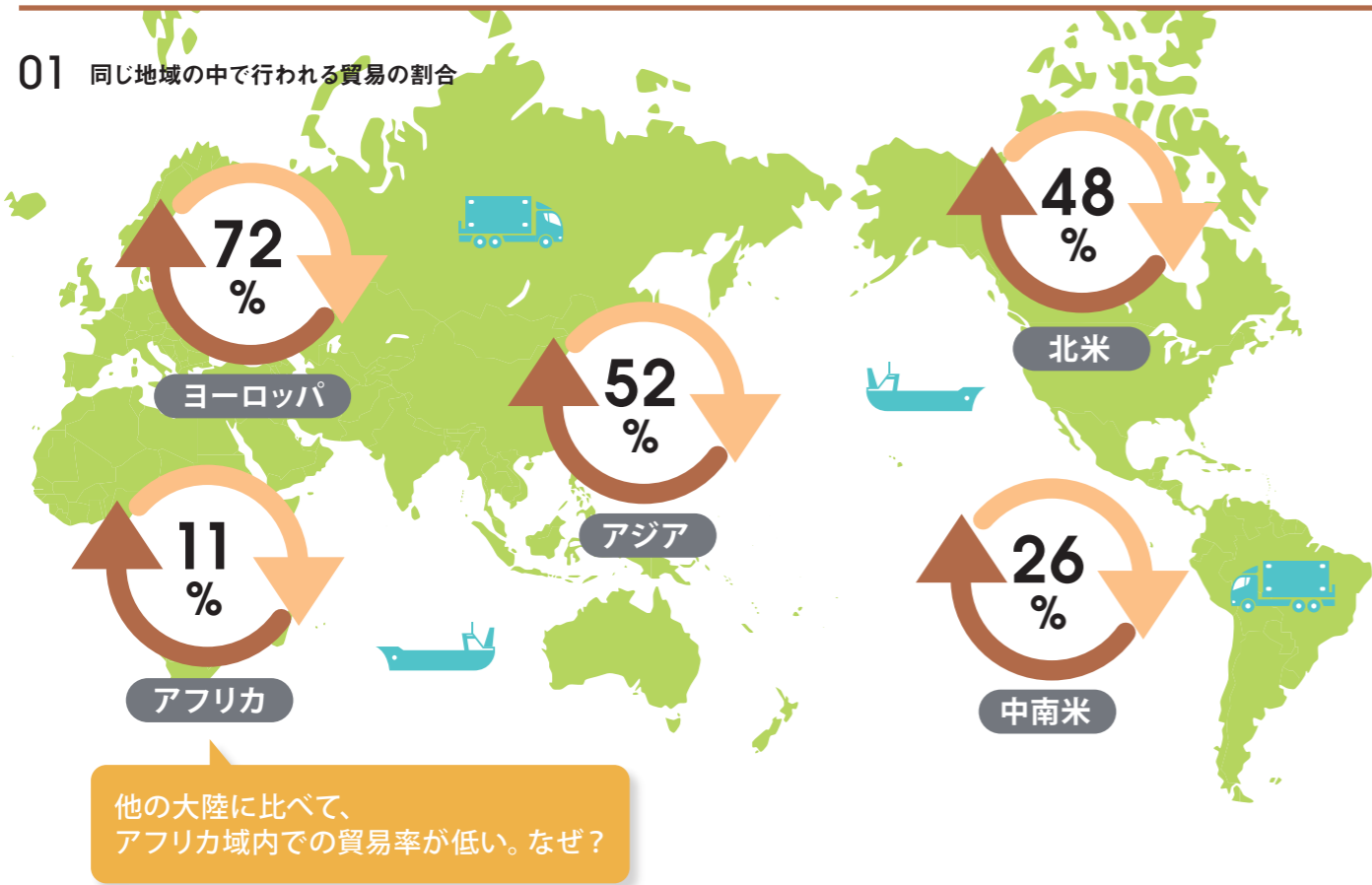
策を取っていかねばなりません。今回は西アフリカ諸国経済共同体(ECOWAS)が早い段階から調整役を買って出て、現場への世界保健機関(WHO)の介入を後押ししました。地域が一体となって協力体制に出たことで、感染国の広がりを抑えることができたとも言えます。公共衛生システムは、これからアフリカで慎重に精査されなければなりません。政府レベルでの制度構築はもちろんです、住民レベルでの啓発活動も重要だと考えています。アフリカの成長の可能性は無限大です。私は地域を取りまとめるNEPADの長官として、今後も公共衛生システムの充実化にはさらに注意を払い、改善を図ってきたいと考えています。



イブラヒム・アサネ・マヤキ

1951年ニジェール出身。97～2000年までニジェール首相を務めた後、教育や保健医療の政策に特化したシンクタンクを設立。2009年からNEPAD計画調整庁長官。

01 同じ地域の中で行われる貿易の割合



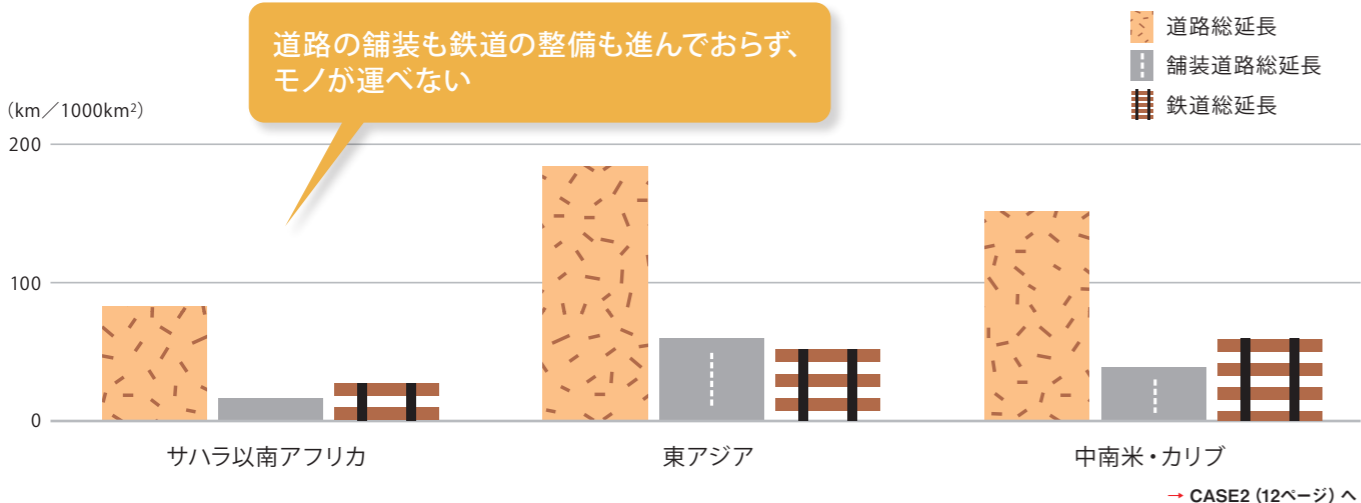
02 輸出・輸入の手続きにかかる平均日数

税関などが制度化されておらず、輸出入に時間がかかる

	輸出	輸入		輸出	輸入		輸出	輸入
東アジア	21日	22日	中東	20日	24日	サハラ以南アフリカ	31日	38日
中央アジア	25日	26日	中南米	17日	19日	サハラ以南アフリカ (内陸部)	40日	52日

03 鉄道・道路の整備状況

道路の舗装も鉄道の整備も進んでおらず、モノが運べない



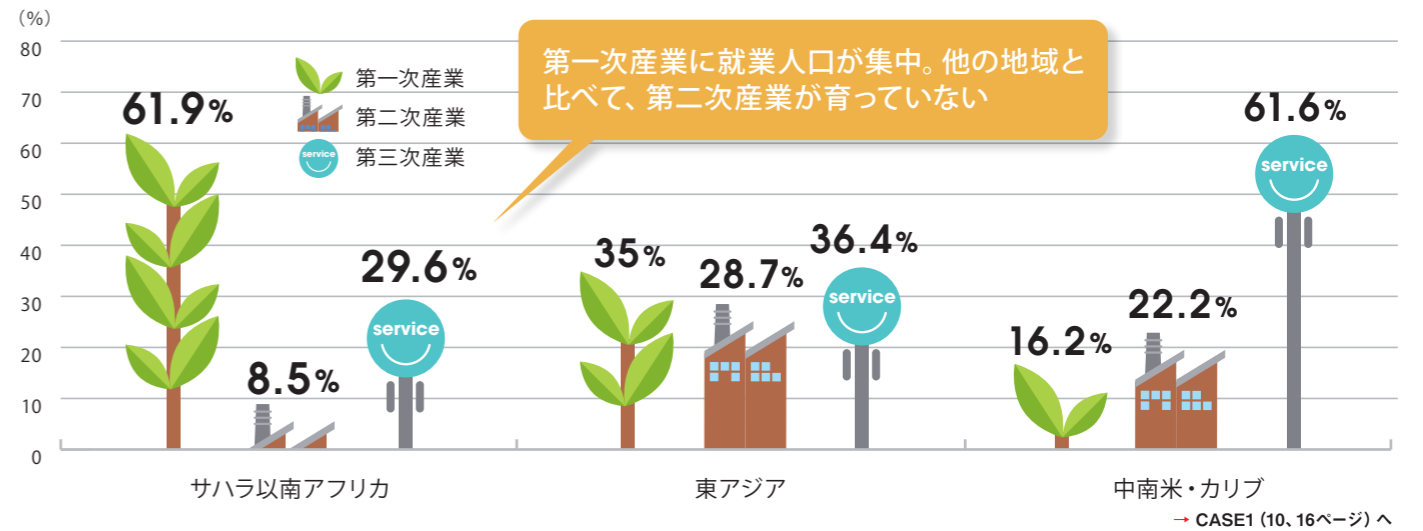
特集
動く、アフリカ

国の数は1大陸で54カ国、人口は10億人以上。アフリカ大陸に秘められた可能性は無限大だがまだ課題も多い。そんなアフリカの現状、乗り越えるべき壁をデータで見よう。

データで見る アフリカの 課題

産業が多様化していない

各産業の就業人口の割合

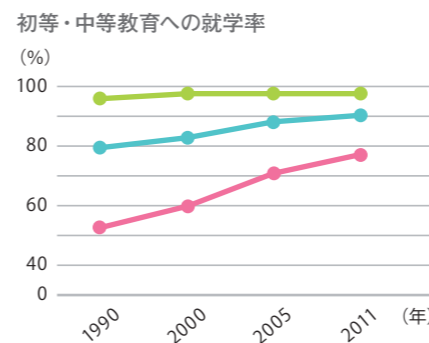


公共サービスが受けられない

ミレニアム開発目標 (MDGs)

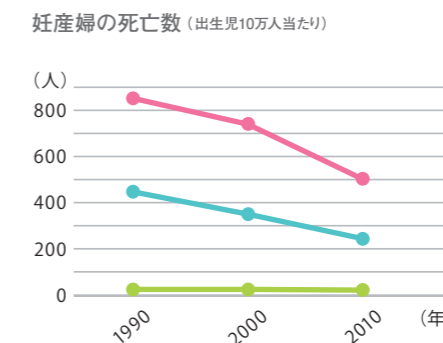
01 GOAL 2 普遍的な初等教育の達成

学校に行きたくても行けない子どもが 約2割



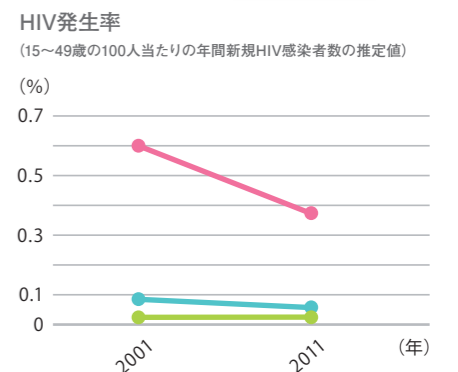
02 GOAL 5 妊産婦の健康状態の改善

適切な保健医療サービスを受けられず、命を落としてしまう妊婦が 出生児10万人当たり 約500人



03 GOAL 6 HIV/エイズ、マラリア、その他の疾病のまん延防止

HIVの発生率が 15~49歳は 約0.4%





日本から訪れた村越祐民外務大臣政務官(当時)に説明するウガンダ教育スポーツ省幹部とNVTIの指導員



NVTIを視察に訪れたアルボ教育大臣と田中明彦JICA理事長

川島専門家たちが主に取り組んだのは、近隣の職業訓練校の手本にもなるようなカリキュラム開発と指導員マニユアルの作成。省庁や大学などから多く

ね。川島専門家たちが主に取り組んだのは、近隣の職業訓練校の手本にもなるようなカリキュラム開発と指導員マニユアルの作成。省庁や大学などから多く

た。しかしいくら豊富に資源があっても、技術・技能を身に付けた人がいなければ産業は育たない。現地の中小企業の技術・技能者育成のため、NVTIを創設することになった。

そこで白羽の矢が立ったのが、驚異のスピードで戦後復興を遂げた日本だった。日本の経験に学び、一つの国としてさらなる成長を目指したい。その思いに込めるべく、現地に派遣されたのが、横瀬多喜さんを始めとする4人の日本人専門家。当時、機械科の指導員に採用されたワングロベ・ファビアンさんは、「日本人の皆さんは手取り足取り、とても丁寧に教えてくださいました。はるか遠いところ

から救世主のように現れ、何か新しいことが動くという実感がありません」と振り返る。

しかしディア・アミン大統領の独裁政権が始まり、ウガンダはほどなくして混乱の時代に突入してしまう。日本の協力は74年をもって終了し、NVTIは創設わずか3年で、現地の人たちが自身の手で運営せざるを得なくなった。

日本と再始動、新たな指導者の育成へ

日本とウガンダが、再びつながったのは90年代。情勢が安定し、また新たにパートナーシップを組むチャンスが到来した。志半ばでNVTIから撤退せざるを得なかつた日本にとって、またとない話だった。

長年の空白を経て、現地に降り立った日本人専門家たちは驚いた。20年以上前に供与した日本製の機械が、まだ大切に使われているのだ。「自分たちでこの職業訓練校を守る」と、日本人の技術者魂を受け継いだ人々が維持管理し続けたという。

それ以降、日本がNVTIと共に主に力を入れてきたのが、指導員の育成だ。2011年から2年間、NVTIに派遣された厚生労働省の川島孝徳さんは、この分野では日本屈指の専門家。東南アジアの職業訓練校の能力強化にも取り組んできたが、アフリカはウガンダが初めての仕事だった。「以前は同じアジアということもあってすぐに溶け込むことができました。でもアフリカは、見た目や文化の違いが際立って浮いてしまい、最初は戸惑いもありましたね。」

の関係者が集まり、参考になる資料や教材を持ち寄った。「みんな何事にも前向きで、ワークショップを何回も開催して議論を重ねました。より良い職業訓練を提供しよう」と真剣で、日本もアフリカの職業訓練関係者も、真面目さや熱意は変わらないと感じました」と話す。現在NVTIは、地元企業の従業員も訓練も請け負うように。3月からは日本の協力も新たな段階に入り、トヨタ自動車株式会社の現地法人、トヨタウガンダとの連携も始まる予定だ。

NVTIの入口から事務棟に続く一本道には、ヤシの並木道がある。そのうちの数本は、90年代に派遣された日本人専門家によって植えられたもの。その立派なたたずまいには、ここにしっかりと根を張って学んでほしいとの思いが感じられる。それを受け取ったかのように、今日もまた、訓練生たちは汗水たらしながら懸命に学んでいる。



校内にはあちこちに日本の協力の軌跡が見られる

東アフリカ ナンバーワンを目指す

パチ、パチ、パチッ。まばゆい閃光が飛び散る中、大きな鉄の板が弧を描いて削られていく。手元が1ミリずれただけでもダメ。その空間には、何ともいえない緊張感が漂っている。

ふとそばを見ると、なじみのある文字が目に入った。「HITACHI SEIKI」。その機械に刻まれている名は、かつて千葉県にあった工作機械メーカー、日立精機株式会社のことだ。よく見るとその他の機械にも、KIWA、AOYAMA、KITAMURAなど、日本の社名が入ったものがある

ちこちにある。「ずいぶん昔に、日本の協力によって導入された機械なんですよ」。そう案内された。

ここは、ウガンダの首都カンパラにあるナカワ職業訓練校(NVTI)。東アフリカ最大級ともいわれ、約1000人の若者たちが、自動車、電気、電子、機械など7つのコースに分かれて学んでいる。機械の油などで手を真っ黒にしながらも、男性も女性も、生き生きとした表情で学んでいる。

その設立は1971年、今から40年以上も前にさかのぼる。ウガンダが独立したのは62年。新たなスタートを切った政府が目指したのが、鉱工業化の推進だっ

最近では、社会進出を目指した女性の訓練生も増えてきた



若者が職で輝ける力を

働くために必要な技術・技能を身に付ける職業訓練校。さらなる成長を目指すアフリカでは、人づくりの重要性に注目が集まっている。そして今、東アフリカの職業訓練をリードするのが、ウガンダのナカワ職業訓練校だ。

from ウガンダ

Uganda





OSBPの敷地内に地元の人々が自由に入り、商売ができてしまうのも現在の課題



ブルキナファソ側にあるサンカンセOSBP。ここで両国の職員が通関手続きに携わる

従事する人が人口の8割を占める世界最貧国の一つだ。隣国のトーゴも人口が630万と少なく大きな産業もない。だが、この地域の発展のカギを握る国際港のロメ港がある。水深が16メートルもある良港で大型船も入れるため、貿易の窓口としてポテンシャルは高い。

現在、トーゴからブルキナファソへはガソリンや野菜、食品などが多く運ばれ、人々の生活を支えている。しかし、国境を越える手続きには数日から数週間を要し、無駄な時間や輸送コストがかかっている。

これを改善するための取り組みがワン・ストップ・ボーダー・ポスト

スト(One Stop Border Post: OSBP)だ。これまで出入国審査、税関、検疫などの手続きは、出国側と入国側の別々の場所で行うのが一般的だった。そこで2カ国の国境に散らばっている関連官庁を一元化(One Stop)に集め、協力して働く仕組みを整えて手続きの効率化を目指すことにしたのだ。

山積み課題を乗り越えていく

しかし、OSBPは西アフリカでは初の取り組み。そう簡単に事は運ばない。2010年にブルキナファソ側の町サンカンセにOSBPが建てられたが、まだまだう

まく機能していないのが現状だ。「手続きをするトラックなどが敷地内でどのように移動するか、動線ができておらず、施設内の地盤や道路、塀の工事も並行して進んでいるため、渋滞が起きてしまっています。そこで現在、効率的な運営を目指したマニュアルをつくっているところだ」と徳織専門家は話す。また、ブルキナファソとトーゴで使われている通関のITシステムを接続し、申告書をデータで共有することで、国境での申告手続きをなくす取り組みが進んでいる。そこで日本の税関分野の専門家としてUEMOAへ派遣中の宮川裕之専門家と藤光基裕専門家が、現地アドバイスなどを行って支えている。

OSBPの円滑な運営には、国境関係者の理解が欠かせない。そこで徳織専門家らが2013年に立ち上げたのが、両国の税関職員や地方自治体の行政官、輸出入業者、通関手続きを行う業者、トラック運転手組合の代表などがメンバーになった諮問委員会。情報を共有する「場」をつくり、課題を話し合うためだ。「多様な組織が関わっているため、最初のころはOSBPの意義を理解してもらい、建設的な議論に持っていくのが大変でした」と徳織さんは話す。しかし、少しずつ関係者との連携が生まれている。サンカンセ

で手続きが始まった直後、考えられないほどの長い渋滞が起こり、ドライバーはトイレやシャワー、食べ物もない中で何日も待つはめに。「彼らの不満が高まる中、諮問委員会で緊急対応策を考え、メンバー自ら炎天下で1日中トラックを誘導して渋滞を緩和させたのです。メンバーが連携して共に課題に取り組み。その手応えを少しずつ感じていきます」と徳織専門家は語る。

地域を一つにまとめていくのは、一人一人の努力の積み重ね。新しい挑戦はスタートを切ったばかりだ。

諮問委員会のメンバーとサンカンセを視察する徳織専門家(右から3人目)と藤光専門家(右端)



スムーズな物流が成長につながる

ブルキナファソ、トーゴ、コートジボワール、ニジェール、ベナン、セネガル、マリ、ギニアビサウ。これらの西アフリカ8カ国は、西アフリカ経済通貨同盟(UEMOA)の一員だ。人口が少ない国もあるが、地域が一つにまとまることで、1億人規模の大きな市場

が生まれる。域内共通の通貨や関税制度を設け、地域内の物流の円滑化や経済の統合を目指している。国際港や各国の主要都市を結ぶルートを、線をつなぐと円になる。日本はこの地域を「西アフリカ成長リング」と命名し、今年から、総合的な地域開発の戦略策定に向けて調査を始める予定だ。その一つが、トーゴのロメ港とブルキナファソの首都ワガドゥガを結ぶ

ルートだ。UEMOAで広域にまたがるインフラ整備支援を担当する徳織智美JICA専門家は、学生時代に初めてブルキナファソを訪れた時をこう振り返る。「夜のフライトで到着したらあまりにも真っ暗で、砂漠に不時着したのかと真面目に思いました」。それから15年がたち、街の明るさに変化を感じる。しかし今でも、農業や牧畜に

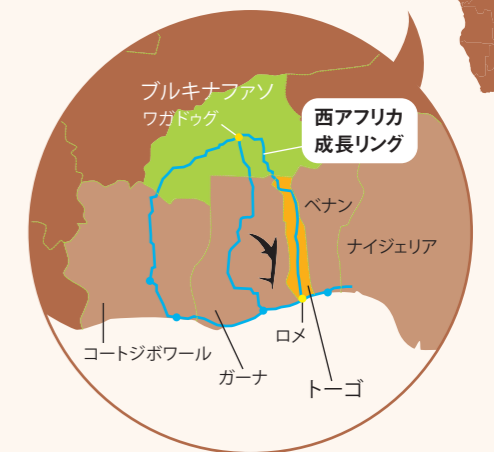


[上]トーゴ側から来たトラックがサンカンセOSBPの入口で長い列をつくることもある
[下]この地域の貿易の窓口となるトーゴのロメ港。輸入の方が多いため、将来的には同港からの輸出増加も目指す

CASE 2

from ブルキナファソ&トーゴ

Burkina Faso & Togo



西アフリカを一つに

小さな国々がひしめく西アフリカ。各国をつなぎ、ヒト・モノ・カネの移動がスムーズになれば地域全体が共に発展できるはず。その大きな目標に向かい、日本人専門家たちが奮闘中だ。



エボラ出血熱の正しい知識を住民たちに伝えるために作成したポスターとパンフレット

朽化し住民が行きたがらないこと、母子だけのための施設だと思われて男性が来ないことなど、さまざまな理由が重なっている。しかし本来、センターは全ての人々の健康促進に役立つ拠点になるべき。ラゴス州保健省は2009年からセンターの活用促進に力を入れ始め、古閑専門家らも15のセンターで助産師の技術向上や5S※を取り入れた施設内の衛生状態の改善に力を入れてきた。

さらに多くの人にセンターを利用してもらいたいと、2014年から州の中でもスラムのあるエチ・オサ地域で活動することになった。センターで患者が来るのを待っているのではなく、保健スタッフがスラムに出張して保健医療サービスを提供する仕組みを浸透させようと古閑専門家は考えていた。



地域の保健スタッフを対象に研修を行い、日本での5Sの歴史などを伝える古閑専門家

産前健診でセンターを利用する妊産婦の数が増えるなど、少しずつ変化が生まれているラゴス州。

その努力の甲斐あって、約3カ月という短期間でエボラ出血熱の終息宣言が出されたナイジェリア。「州保健省の対応の速さには今後の可能性を感じさせた」と古閑専門家は期待する。「ナイジェリアの人々は感情の起伏が激しく、活動する上で大変なことも多い。それでも、いったん信頼関係を築くと、共に全力を尽くしてくれます。州保健省のヤワンデ・アデシナ知事保健補佐官



プライマリー・ヘルス・ケア・センターに来た子ども連れの母親に、川勝義人専門家がどんなニーズがあるかインタビュー

※整理・整頓・清掃・清潔・しつけの略。

スラムでの出張保健サービスとして、保健スタッフがお店の軒先を借りてビタミンAの投与を実施

住民に身近な 保健医療の拠点を 目指す

豊富な石油資源を持ち、アフリカ最大ともいわれる経済規模を誇るナイジェリア。経済の中心地であるラゴス州は、約2000万もの人々が住む大都会だ。

の一人々に届いているわけではない。さらばやかな発展の傍らで、ラゴス州にはガーナなどの隣国から仕事を求めて集まってきた人々が暮らすスラムも多い。ごみが散らばり、排水施設がないため汚水がたまって下痢やマラリアなどの感染症が広がることもある。また、自宅での出産時に命を落とす妊産婦

情報提供が十分できていないこと。「予防には塩水を大量に飲むといい」といった間違った情報まで広まっていた。

母子保健を中心に、5歳未満の子どもやお年寄りには無料で診察を受けられます。誰でも利用できる最も身近な施設のはずなのに、なかなか使ってもらえないことが課題です」と話す。



エチ・オサ地域にはビニールシートを被せた粗末な小屋が立ち並ぶ。雨期にはあちこち水浸しになり、衛生環境は劣悪だ

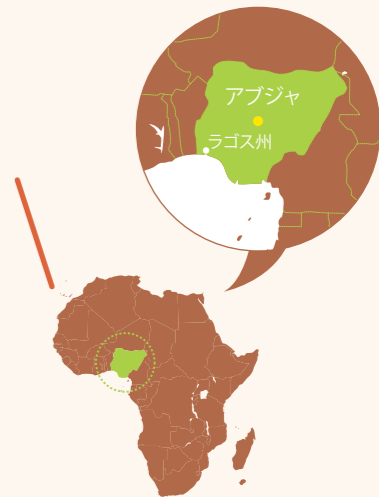


CASE 3

地域で命を支えるために

経済発展の陰で生まれるさまざまな格差。保健医療サービスもその一つだ。貧困層の人々がより健康に過ごせるよう、日本と共に地域での仕組みづくりに取り組んでいるのがナイジェリアだ。

from ナイジェリア
Nigeria



アフリカの未来のために 産業を支える人づくり

特集
動く、アフリカ

アフリカの民間企業や政府機関などで働く若者が日本へ。「アフリカの若者のための産業人材育成イニシアティブ」— ABEイニシアティブが「ついに始動した。昨春秋に来日した彼らの抱負を聞いてみよう。」



インドリ・カン・ダヴィドさん



所属：調査会社
リサーチアシスタント
修士課程：国際大学
国際関係学研究所

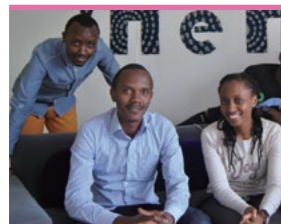
経済から貧困を読み解く

なぜこの世界には、発展している国とそうでない国があるのか。私が国際経済を学び始めたのは、そんな疑問がきっかけでした。先進国の特徴を知り、発展した要因を見つけ、国と国がどのような関係を築いてきたのかも突き詰めたと考えています。

コートジボワールでは農業が最も重要な産業ですが、生産性が低く、食料不足です。また、数年前の政治的な混乱により各地の会社が倒産し、多くの人が仕事を失ったまま。この現状を変えるためには、生産性を高め、産業の発展につなげることが不可欠です。

国際大学ではマクロ経済やミクロ経済、開発政策などを学び、帰国後は貧困削減に向けたプロジェクトに携わりたいと考えています。

ムガルラ・アミーリさん



所属：ICTサービス会社
最高技術責任者 (CTO)
修士課程：神戸情報大学院大学
情報技術研究所

生活に役立つICT技術を

ルワンダでは、ソフトウェア開発などのICT産業が大きく発展しています。私は大学時代にコンピューター工学を学び、同級生と共に携帯電話のアプリケーションを開発する企業を立ち上げました。地域が直面する課題を携帯電話やICTを使って解決することを目指しています。

神戸情報大学院大学では「探求実践」という理念を通じて、ICT技術をどうやって日常生活と組み合わせるかで問題の解決策につなげるか、模索しています。毎日が発見の連続です。

帰国後はもっと多くの人々のニーズに応えられるよう、教育や農業、保健以外の新しい分野で使えるサービスを開発したいと思っています。

ピラカジ・ブレッシングさん



所属：輸送関連会社
エンジニア
修士課程：大阪大学 工学研究所

製造業で未来を変える

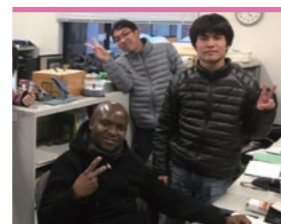
金、鉄、銅、ウラン、プラチナ、マグネシウム、コバルト、ボーキサイト…。南アフリカはこういった金属資源が豊富な国です。

国の発展のためには、これらを活用した産業の活性化が不可欠です。資源をそのまま輸出するのではなく、例えば金やプラチナ、ダイヤモンドを使った装飾品など、製品として国内で加工し、付加価値を

付けることができれば、南アフリカの人々が手にする利益を大きくすることができます。

私は大阪大学で工学デザインの最先端の技術を学んでいます。帰国後は自国に新しい技術を紹介し、工業化を進め、製造業のイノベーションを進めるバイオニアになりたい。そして日本と南アフリカの貿易を活性化できたらと考えています。

カイショーテ・フェリシアノさん



所属：エネルギー省
技術者
修士課程：京都大学 工学研究所

可能性を開く新エネルギー

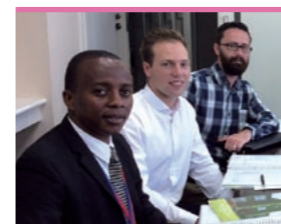
私はモザンビークのエネルギー省で、風力、太陽光、水力、地熱といった再生可能エネルギーの開発を担当しています。

この10年、モザンビークはエネルギー分野で大きな成長がありました。2004年に電力を使える人の割合は7%だけだったのが、2013年には36%に増えました。そして初めての取り組みとして、天然ガスを

供給する海底パイプラインや太陽光パネルの製造工場の建設も始まりました。

京都大学では構造工学などを学び、開発途上国での風力発電タービンの最適な構造デザインについて研究しています。再生可能エネルギーの開発を進めることで、電力ネットワークを広げ、地方にも電力を届けられる第一歩になると思うからです。

レオ・カリマさん



所属：開発コンサルティング会社
コーディネーター
修士課程：立教大学 経営学研究所

発展のカギを握るインフラ

大きな港を持つタンザニアは、東アフリカの国々の流通のハブとなる国です。政府は各地をつなぐ道路整備に力を入れているものの、重量過多のトラックがたくさん行き来するため、いくら舗装しても道路はすぐに傷んでしまいます。

私は開発コンサルティング会社のナショナルコーディネーターとして、タンザニアの運輸インフラ計画に携わってき

ました。その仕事を通して痛感したのが、鉄道網を整備することの大切さ。現在はほとんど機能していませんが、安く効率的に大量の貨物運べる鉄道網は、ビジネスを活性化させるカギになるはず

です。立教大学では日本のインフラ開発の経緯などについて学び、将来は日本とタンザニアの企業の橋渡しができればと考えています。

アフナン・アバヤジードさん



所属：環境調査会社
調査員
修士課程：熊本大学大学院
自然科学研究所

鉱山での環境汚染を防ぐ

スーダン金は金などの鉱物資源に恵まれた国。しかし鉱物資源の採掘は、時に環境問題を引き起こしてしまいます。近年、スーダンでは経済発展に向けて金の採掘が活発になってきているので、伝統的な採掘方法がどのように環境に影響を与えているのか、採掘に使用する水銀の汚染が広がっていないかを熊本大学で研究しています。

水銀は、鉱山で働く人々の人体に影響を与えることも考えられます。熊本は水銀中毒による水俣病を経験した場所。その過去の経験から学べることは多いはず。帰国後は環境調査員として、鉱業省や環境省などで日本で学んだ知識を生かせればと考えています。

ピラッサ・ケルベッサさん



所属：革製品製造会社
生産管理マネジャー
修士課程：早稲田大学大学院
情報生産システム研究所

ものづくりの秘訣を学ぶ

日本はものづくりの技術をどう培い、製造業で世界を引っ張ってきたのか。私は革製品を製造する会社で、日本の協力で普及したカイゼンなどを取り入れた品質管理を担当しています。ですから、日本で学ぶことは長年の夢でした。

エチオピアには家畜が多く、革製品の原料がたくさんあるのに、まだ大きな産業にはなっていません。せっかくの資源を活用できていないのです。早稲田大学で学ぶことで、品質と生産性をより高める知識を身に付け、母国の革産業の発展に貢献したいのです。

日本ではお風呂場のタオル掛けがバスタブから届く位置にあるなど、小さなことでもきちんと計算されていることに驚き、日本が大好きになりました！

マイタイ・ムトウマさん



所属：エネルギー関連会社
管理マネジャー
修士課程：宮崎大学 工学研究所

工業化の原動力を確保

2014年、国際通貨基金のランキングで、ケニアは開発途上国から中所得国に格上げされました。政府は「ケニアビジョン2030」という長期国家開発計画を立て、工業化による経済発展を目指しています。

しかし、エネルギー不足が壁になっています。2013年時点で、68%の人々がエネルギーとして使っているのはまき。電力を使えるのは人口の25%だけ

です。既存の水力、地熱、火力発電に加え、これからは太陽光や風力、地熱発電も組み合わせる必要があります。

宮崎大学では再生可能エネルギーとスマートグリッド技術の融合などについて学んでいます。工業の活性化につなげられれば、優秀なのに仕事がないケニアの若者に雇用の機会を生み出せるはず

※「第5回アフリカ開発会議 (TICAD V)」で安倍晋三内閣総理大臣が表明。5年間でアフリカから1,000人を受け入れ、日本の大学院での教育と企業でのインターンシップの機会を提供する。



「顔と顔を突き合わせて相手と深く関わっていくのがニバルレキレの強み」と話す小山さん(右)



患者が治療薬を売ってしまうこともあるため、薬物乱用の危険性を伝えるワークショップを開催



「ハウスオブメルシー」で薬物依存と向き合い、社会復帰を目指す若者たち

働き手がHIV/AIDSで亡くなる
と、家族は経済的にも精神的にも打撃
を受ける。喪失感から立ち直れず、学
校も卒業できずに退学してしまうエイ
ズ孤児も多い。
「自分を大切にできないと相手も大
切にできません。まずは自尊心を取り
戻してもらう必要があります。ニバル

解決策を共に探し 新しい道を進む

「何でも屋」の小山さんに、地域の人々
は次第に心を開いていった。「これか
らは活動に名前を付けたら?」ニバル
レキレ「はどう?」と提案された。こ
れは、南アフリカで使われているズ
ール語で「あなたはあなたであるだけ
で素晴らしい」という意味。そんな思
いを込めて団体を立ち上げ、今も活動
を続けている。

どんな状況でも、どんな人も、この
世界に一つだけの大切な命だと伝えたい
。「老若男女、生きづらさ」を抱
える人の重荷を減らせるように共に歩
んでいくだけ」と語る小山さん。それ
がずっと変わらないニバルレキレの信
念だ。

レキレのメンバーは、現地スタッフも
含めてみんなソーシャルワーカー。何
度も直接会って、相手が本音を話して
くれるのを待ちます。その瞬間から新
しい一歩が始まりますから。」
05年には、エクルレニのエマブニペ
地区に、一緒に生きる共同体を意味
するセチャバコミュニティセンター
を設立。約150人のエイズ孤児が放
課後に通い、地域の人々がボランティア
アで食事を用意したり補習を行ったり
する。小山さんも年に数回、南アフリ
カに渡航してサポートし、現地スタッ
フのムズワキさんを中心に、彼ら自身
の力で運営できるようにしてきた。
そして最近、「世界の人びとのための
JICA基金」を活用して新たに取
組み始めたのは、若者の薬物依存への
対策。無料で手に入るHIV/AIDS
の治療薬にマリファナやヘロインを混
ぜた薬物が流行しているからだ。そこ
で、薬物依存から立ち直る治療を受け
られる施設「ハウスオブメルシー」と
連携し、薬物乱用防止に向けた啓発活
動や若者の進学相談を行っている。15
歳以上のエイズ孤児を支援する施設や
制度は他にほほえないからだ。

V/AIDS患者の多い国。「行ってみよ
う!」。何かの縁を感じた小山さんはそ
う決意し、2003年から約2年半、
ヨハネスブルクの貧困地区で活動した。
携わったのは、HIV/AIDS患者やそ
の遺族、HIV/AIDSで親を亡くした
エイズ孤児のケアだ。「ソーシャルワ
ーカーは相手がどんな問題を抱えている
かに耳を傾け、解決策を一緒に探して

いくのが仕事です。患者さんがどんな
暮らしをしてきたのか、なぜHIV/
エイズに感染したのか。職業柄、も
っと深く知りたいと思うようになりま
した」と小山さんは振り返る。
思い立ったら即行動。小山さんは、
隣接するエクルレニのスラムを回って
話を聞いたり、HIV/AIDS教育の
普及や患者の自助グループの手伝いを

「ニバルレキレ I am special」は、
小山えり子さんが代表を務めるNGO
の名前。ちよつと変わったこの団体名
には、ある熱い思いが込められている。
小山さんはソーシャルワーカー。東
京都内の病院で勤務していた時、在留
資格のないアフリカ人の患者が搬送さ
れた。末期のHIV/AIDS患者。ア
フリカに関心を持ったきっかけだった。
ある日、ふと新聞の小さな記事に目
が留まった。南アフリカのホスピスで
日本人が活動しているという内容だっ
た。同国は世界でも3本指に入るHIV



セチャバコミュニティセンターでは無料でエイズ孤児を受け入れ、現地スタッフと地域のボランティアで運営している



スラムの入り口にあるセチャバコミュニティセンターの庭で、スタッフと遊ぶエイズ孤児たち。子どもらしく過ごす時間をつくり出す



セチャバコミュニティセンターに通う近隣の小学校の子どもたち。ボランティアが準備した給食を提供



国際協力の担い手たち

ニバルレキレ ~ I am special! ~

心のケアで輝く一人一人の命

ずっと自分の中にしまい込んでいた深い悩み。
それから解放された瞬間、人は少しずつ変わっていく。
HIV/AIDSが社会に影を落とす南アフリカで、
人々の心を照らそうと奮闘するNGOがニバルレキレだ。



「現職参加」

三上 志保

MIKAMI Shiho

農業高校で教えた 食品加工の経験を生かして

西アフリカのガーナ。首都アクラから約400キロ北西にあるアシャンティ州アダンシ・ノース郡は、森林に囲まれた農村地帯だ。

ある日、マンゴーの木の下で、20人ほどの男女が集まり、真剣なまなざしで話を聞いていた。視線の先にいるのは、青年海外協力隊員の三上志保さんだ。「今日はみんなでジャムの作り方を学びましょう！」。

農家だった祖母の影響で、幼いころから農業を身近に感じていた三上さん。大学と大学院では農学を専攻し、地元・岩手の農業高校で8年間、農業や食品加工などの科目を担当した。

JICA Volunteer Story

PROFILE

岩手県出身。大学と大学院で農業を専攻し、岩手県内の農業高校で勤務。2013年7月から青年海外協力隊（農畜産物加工）としてガーナで活動中。

「ジャム作りを通じて 農家の人々に自信を持ってもらいたい」

岩手県の農業高校で、農業や食品加工などについて教えてきた三上志保さん。その経験を生かして今、アフリカの農村部で配属先の仲間と新商品の開発に挑戦中だ。

教員の仕事にも慣れてきたころ、ふと、高校生の時から憧れていた「農業で世界に貢献したい」という夢を思い出す。さらに、東日本大震災時に沿岸部の学校の体育館で避難所の運営に携わり、苦労した経験から「ボランティアの在り方を見つめ直したい」と一大決心。協力隊に応募し、2013年7月から、ガーナ食料農業省のアダンシ・ノース郡役所に配属されている。

三上さんが暮らすこの地域では、オレンジやキャッサバ、ヤマイモ、カカオなどの栽培が盛ん。しかし、人口の多い都市部まで運べる道路が整備されておらず、収穫時期になると供給過多で捨てられてしまう。換金されないまま廃棄されるオレンジは約7割。農業組合もなく、市場の商人に買いたたかれることも日常茶飯事だ。

三上さんの役割は、農産物の保存性を高め、付加価値のある商品を生み出すこと。現在、月に数回、各地でオレンジ農家や学校の先生などを対象にジャム作りの講習会を開いているが、「半年以上思うように活動できず、歯がゆい日々を過ごしていた」と振り返る。

赴任したばかりのころ、オレンジの加工技術の指導をしようと張り切っていたが「予算が下りないからしばらく待つてほしい」とまさかの反応。しかし、立ち止まっているわけにはいかない。同僚に頼み込んで一緒にオレンジ農家を回り、まずは販売価格や廃棄量などの状況把握に努めた。一人一人と顔を突き合わせて、収入向上につながるジャム作りのメリットの説明もしたが、すぐに関心を示す人は少なかった。

そうした中、三上さんのもとに一本の電話が入る。以前、隊員仲間のつながりで知り合った学校の教員が講習会に興味を示してくれ、ついに講習会が実現することに。さらに「本当は農家の人たちに教えたい」と彼らに打ち明けると、オレンジ農家を集めて講習会の場をつくってくれたのだ。



a.同僚たちと一緒に、どのようにしたら講習会がうまくいくかを検討中。「支えてくれた仲間がいたからこそここまで来られた」と三上さん。（撮影：久野武志）
b.ジャム作りの講習会は、学校や小さな商店の軒先、時には屋外で開かれ、毎回20人以上が参加している
c.ベーカリーを経営するオフォリさんと一緒に開発したジャムパンは1日で完売。第2弾の試作品を考案中だ
d.農村で行った講習会で出会った子どもたち。決して裕福とはいええない生活だが、生き生きとした笑顔を見せてくれた



ジャム作りに大切なのは砂糖の量と温度、そして衛生管理。その専門知識の豊富さは、農業高校で教えてきた経験のたまものだ

貧困から抜け出せない 悪循環を断ち切りたい

以来、「私の地域でジャム作りを教えてくださいませんか」という話が少しずつ入ってくるように。食料農業省の同僚で良き相棒のフランクさんと、あちこちに出向いている。農家の人から、「ニヤミンシラウオ（神のご加護を！）」と感謝の言葉を掛けられたり、「自分でもやってみるね！」「ただ野菜を売るだけじゃなく加工するって大事」などの声が聞こえてくるようになり、やりがいを感じ始めている。

「講習会が開けるようになったのは、信頼できる仲間ができたから」という三上さん。活動のカギとなったオレンジ農家への訪問では、現地語でのコミュニケーションに奮闘する三上さんの通訳兼仲介役として、いつも一緒に動いてくれる同僚、フランクさんの存在が大きい。「農業人口が多数を占めるにもかかわらず、政府のサポートはまだまだ行き届いていない。いつまでも貧しいこの国の農家の現状を変えたい」と強い思いを持つ彼は、熱心に三上さんの考えを聞き、受け入れ、協力してくれているのだ。

昨年9月には、うれしいニュースも飛び込んできた。ベーカリーを経営する女性、オフォリさんが三上さんの活動に共感し、ガーナでは珍しいジャムパンを共同で製作。試験販売した110個が1日で完売した。

今後は、地元の女性グループにオレンジの安全な加工方法を教え、本格的に販売していきたいという三上さん。「食品加工は、貧困から抜け出せず悪循環に陥っている農家の人たちの自信につながるはず」と意気込む。市場開拓を視野に、地域の成功例をつくるのが目標だ。三上さんの優しいまなざしが、ガーナの人々の心を動かしている。





ザンビアの子どもたちへ送るメッセージを考える陽明高校の生徒たち。離れていても、つながることができる方法を知った



ザンビアの食文化について伝える友寄先生。「貧困や感染症といった深刻な問題ばかりでなく、沖縄との共通点や魅力的な文化があることを伝えたい」



JICA沖縄主催で毎年行われる「おきなわ国際協力・交流フェスティバル」では、授業で学んだことを発表

新しい街は隣人を傷つけていた？

「サバイディー！」
元気なあいさつとともに登場した男性を興味津々な表情で見つめるのは、沖縄県浦添市にある沖縄県立陽明高等学校の2、3年生。「ラオス語で、こんにちは、という意味なんですよ」。青年海外協力隊OBの神田青さんが、優しく教えてくれた。
この日、高校から車で10分ほどのJICA沖縄を訪ねた高校生たち。6つに分かれたグループごとに手渡されたのは2枚の紙。1枚には真ん中に青い池が、もう1枚には家や学校、工場、畑などが描かれている。

「それを使って、グループごとに街をつくってみましょう。突然の指示に少し戸惑いながらも、作業に取り掛かる。家の絵を切り取って池の右端に貼ったりしながら、「学校と病院は家から近い方がいいよ」「工場は住宅地から遠ざけよう」と、思うがままに新しい街をつくり始めた。
作業時間は20分。その後、各グループの代表が「市長」として、それぞれの構想を発表することになった。「ニンジンが特産物だから、キャロットシティーと名付けました」「観光地にして、外から人を呼びたい。どれも夢にあふれたものだった。
全ての発表が終わった後、何やら陰しい顔で絵を並べ始めた神田さん。6枚を横につなげてみると、なんと一本の大きな川になった。
「実は、この池はつながっていたんです。神田さんは、隊員時代の出来事を語り始めた。ラオスではメコン川の上流に造ったダムによって周辺地域の人々の生活が豊かになった一方、下流に暮らしていたカンボジアやタイの人々の生活は、水が枯れ、立ち行かなくなってしまう。「目で見える範囲の外にある物事も想像できるようにするのはいいと思います」。
何げない気持ちで始めたまちづくり。神田さんの話を聞いて、シヨックを隠し切れない表情を見せる子も。工場を住宅から遠ざけたり、欲しいものだけ

を家の近くに置いたりしたけれど、それが別の地域の人に迷惑をかけていたかもしれない。2年生の友利健人さんと城間有貴さんは「自分たちのことしか考えていなかったのかも」と話していた。
「世界に目を向ければ進む道も見えてくる」
「Think Globally, Act locally」。陽明高校の選択科目「国際理解」の授業のモットーだ。この授業を担当するのが今回の訪問学習の仕掛け人、友寄美恵子先生だ。物事をグローバルに考え、自分の足元から行動してほしい。そんな思いを持ち始めたのは、今から5年ほど前。赴任したばかりのころ、開発途上国を含む世界100カ国で同時開催される「世界一大きな授業」に参加し、開発教育の存在を知った。「アジアや南米を旅行したとき、幼い子どもたちが働いているのを見て、世界の現状を教える子たちに話さなければと思っていました。それまで英語の教員として欧米の文化を伝えることはあっても、途上国に触れる機会はほとんどなかったんです」。
そこで2009年から、学校ぐるみでJICA沖縄のプログラムをフル活用。2012年から2年間は、沖縄県の国際理解教育研究指定校になった。友寄先生もJICAの教師海外研修でザンビアを訪問し、帰国後は現地で見



南太平洋地域出身のJICA研修員と交流

世界とつながる教室

足元を見つめ、未来につながる授業を

世界に目を向け広い視野を持てる人材を育てようと、「国際理解」の授業を実施している沖縄県立陽明高等学校。JICAの出前講座や教師海外研修などを活用しながら、主体的に行動できる生徒を育てている。

「畑は郊外かな」「浄水場も必要だね」。神田さんが準備した紙を使って建物や施設の配置を考える



6グループがつくった「街」を並べてみると...



たことをふんだんに盛り込みながら、アフリカを身近に感じてもらえるような授業づくりに奔走している。
「将来は、貧しい子どもたちのための施設を開き、経営者になりたい」と夢を語る高校生もいる。2年生の島袋りおなさんは、JICAと沖縄県の連携事業「おきなわ国際協力人材育成事業」を通じてバングラデシュを訪問。協力隊の活動や日本人が運営するNGO施設などを見て回り、人生の目標を見つけた。

「生徒全員が、将来海外で活躍する必要はないのです。授業を通じて世界のこと、自分の立ち位置を知れば、進む道も見えてくるはず」。友寄先生は、そんな気持ちで今日も、日本の教室から世界に思いをはせる。



南スーダン事務所のスタッフたちと田口さん(左端)。現地スタッフと日本人、14人で力を合わせて奮闘している

教育を軸に、南スーダンの国づくりに貢献したい

日本での教員経験を生かし、アフリカなどで教育分野の支援に携わってきた田口晋平さん。2011年に独立を果たしたアフリカの南スーダンで、現地の人々に平和への道筋が開けるよう、支援に奔走している。

教員経験を生かして国際協力の現場へ

高校生の時、大学受験の勉強になればと、何気なくBBCニュースを見ていました。そこで初めて、世界には学校に行けず、家族のために働かなければならない子どもたちがいることを知ったのです。自分がいかに恵まれた環境にいるかに気付き、もどかしい気持ちでいっぱいになりました。

大学卒業後は地元の中学校の教員になり、毎日が怒涛のように過ぎていきました。5年目に入り少し余裕が出てきたころ、日本以外で教員経験をかせないかと考え、青年海外協力隊に参加。南アフリカで、理科の教員に向けた研修会などを企画しました。当時はアバルトヘイトの名残もあり、現地の教員は免許を持ちながらも指導経験が浅く、教えるのもままならない状況でした。

研修会では学びの場に飢えていた教員たちの反応に手応えを感じる一方、一人のボランティアにできることは限られていると痛感したのも事実。「もっと多面的にインパクトを生み出す仕事をしたい」と思い、JICA A専門家としてケニアに赴任しました。現地の人たちと頭を悩ませながら、日本の教員研修のモデルをケニアの実情に合わせて機能する形につくり直す作業に取り組み、日本と開発途上国両方の現場を経験していたことがとても役に立ちました。

不安定な騒乱の中で好循環を生み出す協力を

日本の教育現場を離れ、途上国の教育に携わって6年、もっと広く物事を捉え分析する力が必要と感じて、アメリカの大学院に進学しました。世界各地の教育政策に関する多様な研究手法を身に付けたかったのです。

そして修了後、社会人採用枠でJICA Aに就職。現在は南スーダン事務所、総務や安全管理業務に加え、教育分野のプロジェクトを担当しています。2011年に独立を果たした南スーダンでは、数十年にわたり続いた内戦の影響で、就職につながる技能を学ぶ機会がほとんどありません。人生の大半を難民キャンプで過ごしてきた人々が大勢いる中で、彼らが職業訓練を受けられるよう、職業訓練校の設置やカリキュラムの作成、インストラクターの研修などに、現地の政府と共に取り組みました。

しかし、2013年12月から各地で断続的に銃撃戦が勃発し、国外への避難を余儀なくされてしまいました。南スーダンでの事業が軌道に乗り始めた矢先の出来事だっただけに悔しい思いをしましたが、昨年11月には避難勧告のレベルが下げられ、首都ジュバに戻る事ができました。現地の政府や住民から「よく帰ってきてくれた」という声をたくさん聞き、私たちが現場に身を置く意義を実感しました。



JICA南スーダン事務所
田口 晋平
TAGUCHI Shimpei

大学卒業後、数学の教員として中学校で勤務。青年海外協力隊、JICAジュニア専門員、JICA専門家を経て、アメリカで国際教育政策の修士号を取得。2013年から現職。



南スーダン労働省職業訓練局長とプロジェクトの方向性について打ち合わせ

大変な時だからこそ、人々に寄り添い、支援を継続していくことが大切です。職業訓練のプロジェクトでは、難民だった人が日本人専門家の指導を受けて職業訓練のインストラクターになり、他の難民を支える立場になっている姿を見ました。不安定な騒乱の中でも、このように良い循環を生み出していくことが平和への道筋であり、支援とはそのためにあると強く感じています。

教育は国づくりの根幹に関わります。日本と途上国、それぞれの教育現場での経験を生かし、これからも途上国の人々が質の高い教育を受けられるよう、力を尽くしたいと思います。

世界の災害に対し、国際緊急援助隊が支援を実施

01



マレーシアの洪水被害に対して、現地に到着した緊急援助物資をトラックで運ぶ



署名文書の交換を行う大久保JICAマレーシア事務所長代行、宮川駐マレーシア日本大使、カシム大臣(右から)

この数カ月、世界各地で発生している大規模な災害に対して、日本は国際緊急援助隊（JDR）の派遣や緊急援助物資の供与などの支援を展開しています。

11月に西アフリカの島国カーボヴェルデで発生した火山噴火と溶岩流の被害に対しては、発電機とコードリールを供与し、12月31日に首都プライアに到着しました。これに先立ってセネガルで行われた引渡式では、日本側の代表の一人として出席した加藤隆一JICAセネガル事務所長が、「日本の協力が、避難生活を強いられている被災した方々の苦しみの緩和につながってほしい」とあいさつをしました。

また12月には、マレーシアで記録的な大雨による洪水被害が発生。多数の死者が出た他、10万人以上が避難を余儀なくされました。これに対して日本は、浄水器、簡易水槽、発電機を供与。その引渡しを受けて、マレーシアのシャヒダン・カシム首

相府大臣は「今回の洪水はこれまでで最も被害が大きく、日本の緊急援助物資により被災地における被害のインパクトの緩和につながる」と感謝の意を示しました。

宮川眞喜雄駐マレーシア日本大使と共に引渡式に出席した大久保恭子JICAマレーシア事務所長代行は、「一刻も早く、日本からの緊急援助物資が被災者へ配布されるよう望む」と述べました。また、日本はこういった緊急支援だけでなく、平時から防災体制整備に向けた支援を各地で実施していることも紹介しました。

同じく12月にインドネシアのジャワ海沖で起きたエア・アジア航空機の墜落事故では、JICAはインドネシア政府の要請を受けて、総勢5人の国際緊急援助隊先遣チームを首都ジャカルタに派遣。その後、海上自衛隊の護衛艦2隻とヘリコプター3機から構成される国際緊急援助隊本隊を派遣し、現地で捜索活動を行いました。

アフリカの未来を考えるシンポジウムを開催

02



パネルディスカッションでは、アフリカのオーナーシップを支援するパートナーシップの重要性が再確認された(写真提供: UNDP Tokyo)

近年、目覚ましい経済成長を続けるアフリカでは、偏った産業構造や高い失業率などの問題が顕在化しています。12月3日、アフリカ開発の展望について議論するシンポジウムが、国連開発計画（UNDP）とJICAの共催で行われました。

第1部の基調講演では、UNDP アフリカ局のアヨデレ・オデュンサ・チーフエコノミストが、インフラ整備や農業生産といった成長をけん引する分野に日本からの民間投資が重要と訴えました。第2部では、吉澤啓JICAアフリカ部企画役が雇用創出や貧困削減はまだ改善の余地があると指摘した上で、農業生産性の抜本的な向上、労働集約的な製造業への労働力と資本の移動など、JICAのアフリカ開発における基本認識を述べました。また「ポスト2015開発アジェンダ」では、社会セクター開発、安全保障、テロ対策などの分野に取り組んでいくと語りました。

JICAと読売巨人軍が業務協力協定を締結

03



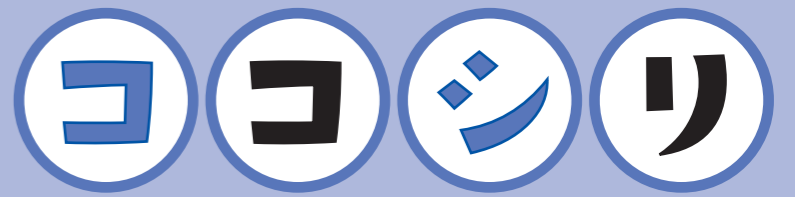
署名式で握手をする久保博読売巨人軍社長(左)と田中明彦JICA理事長

1月5日、開発途上国における野球の普及・振興を目指して、JICAと読売巨人軍がボランティア事業に関する業務協力協定を結びました。

JICAはこれまでに約2800人のボランティアをアフリカ・アジア・中南米などに派遣し、野球の普及・発展に寄与してきました。今回の協定は、この事業に読売巨人軍のノウハウ・人材を活用しようというもので、第一弾として2月18日から1週間、コスタリカに巨人軍の少年野球教室「ジャイアンツアカデミー」の指導者が研修講師として派遣されます。

また、途上国で活動する野球隊員が、ジャイアンツアカデミーの指導テキストを中南米の野球指導書として活用できること、派遣前の隊員にジャイアンツアカデミーが指導法を教授することも協定に盛り込まれています。

野球を通じた国際協力へのさらなる貢献が期待されます。



「ここが知りたい」。国際協力に関係する
いろんなトピックを分かりやすく解説します!

12 月15日(木)まで、ペルーの首都リマで、「国連気候変動枠組条約第20回締約国会議(COP20)」と「京都議定書第10回締約国会合(CMP10)」が開かれました。これらの会議は、国際社会が一丸となって取り組むべき気候変動・温暖化対策について、各国の代表者が一堂に会して話し合うもの。今年末にバリで開催されるCOP21で2020年以降の新たな国際枠組の合意が予定されています。



ハイレベル・セグメントで政府代表演説を行う望月環境大臣

国際会議

「国連気候変動枠組条約第20回締約国会議(COP20)」 「京都議定書第10回締約国会合(CMP10)」

国際社会が一丸となって
気候変動問題に取り組む

昨年12月、南米のペルーで気候変動に関する国際会議が開催されました。

ことからは、今回は各国が提出する温暖化ガス削減目標に盛り込む項目などに関する決定文書が採択されました。
日本からは望月義夫環境大臣らが出席し、現在議論が進められている新たな国際枠組について、①定量化が可能な削減目標の提出、②目標達成に向けた対策措置の実施、③実施状況のレビューを受けることとの義務を各国が負うべきなどと主張しました。

会期中、欧州連合(EU)からは、日本の削減目標の早期提出、フランスやイギリスからは、日本が気候変動問題の解決をリードしていくことへの期待が示されました。また途上国の温暖化対策を支援する「緑の気候基金(GCF)」について、日本政府は、国会の承認が得られれば最大15億ドルを拠出する方針を示しました。



日本から供与された個人防護具は、東京都の提案により、都の備蓄倉庫から提供を受けた



WHOを通じて派遣された日本人専門家が、今後の対策などについてアドバイス

西 アフリカを中心としたエボラ出血熱の感染拡大に伴い、現地では医療従事者の感染防止用の個人防護具が不足しています。

こうした事態を踏まえ、安倍晋三内閣総理大臣は国連総会の場で、日本から個人防護具を供与する用意がある旨を表明。日本政府は、リベリア、シエラレオネ、ギニア、マリからの要請に応え、東京都から提供された約70万セットの個人防護具をこれらの国々に供与しています。

このうち約2万セットは、国連エボラ緊急対応ミッション(UNMEER)の要請に基づき、日本が

「エボラ出血熱対策のための支援」
日本の支援で
感染の拡大を防止

国際緊急援助隊(JDR)として派遣した自衛隊機によって、UNMEERが本部を置くガーナの首都アクラに12月に輸送されました。残る約68万セットは、世界保健機関(WHO)より輸送され、感染国において活用されます。
また、これまでに延べ13人の日本人専門家がシエラレオネとリベリアにWHOを通じて派遣され、現地で感染予防活動を行っています。今後も日本はこうした人的・物的・金銭的支援を切れ目なく行うことで、1日も早いエボラ出血熱の流行の終息に貢献する考えです。

緊急援助

Message from Pakistan
未来を担う子どもたちのために



ポリオワクチンへの理解を促すための啓発活動



子どもにポリオワクチンを接種する様子

ポリオという病気をご存知でしょうか。口から入ったウイルスが脊髄の一部に感染することで手足にまひが出る病気です。乳幼児がかかることが多いといわれています。
現在、世界にはポリオの発生国が3カ国あり、そのうちの1つがパキスタンです。しかし、ワクチン接種に対するテロ組織の妨害や誤った理解に基づく住民の接種拒否などの課題があり、一部の地域で発症者数が増加しています。

日本は、1996年からパキスタンに対しワクチン供与などの支援を継続して行っており、「二国間のドナー」として最大の援助国です。中でも、2011年からビル&メリンダ・ゲイツ財団と連携して実施した円借款は、革新的な手法でした。ワクチンの調達、その投与のための一斉キャンペーンの実施を支援するために約50億円を貸し付けた上で、パキスタン政府があらかじめ設定された予防接種活動を着実に実施した場合は、同財団が代わりに返済を行うこととしたのです。2014年4月には、パキスタン政府が予防接種活動を着実に実施したと認められ、同財団による返済が決定しました。

在パキスタン日本国大使館

黒田裕 一等書記官

現地からのメッセージは、ODAメールマガジン(www.mofa.go.jp/mofaj/gaiko/oda/mail/)でご覧いただけます。

気候変動枠組条約締約国会議(COP)、京都議定書締約国会合(CMP)とは?

1992年、大気中の温室効果ガスの濃度を安定化させることを究極の目標とする「国連気候変動枠組条約」が採択され、国際社会全体で地球温暖化対策に取り組んでいくことに合意。同条約に基づき、国連気候変動枠組条約締約国会議(COP)が95年から、京都議定書締約国会合(CMP)が2005年から毎年開催されています。



日本ババロンにおいて実施された「二国間クレジット制度(JCM)署名国会合」に出席した望月環境大臣とJCMの署名12カ国の代表者

会合	開催地	開催時期
COP1	ベルリン(ドイツ)	1995年
COP2	ジュネーブ(スイス)	1996年
COP3	京都(日本)	1997年
COP4	ブエノスアイレス(アルゼンチン)	1998年
COP5	ボン(ドイツ)	1999年
COP6	ハーグ(オランダ)	2000年
COP6再開会	ボン(ドイツ)	2001年
COP7	マラケシュ(モロッコ)	2001年
COP8	ニューデリー(インド)	2002年
COP9	ミラノ(イタリア)	2003年
COP10	ブエノスアイレス(アルゼンチン)	2004年
COP11/CMP1	モントリオール(カナダ)	2005年
COP12/CMP2	ナイロビ(ケニア)	2006年
COP13/CMP3	バリ島(インドネシア)	2007年
COP14/CMP4	ボスナ(ボスニア)	2008年
COP15/CMP5	コペンハーゲン(デンマーク)	2009年
COP16/CMP6	カンクン(メキシコ)	2010年
COP17/CMP7	ダーバン(南アフリカ)	2011年
COP18/CMP8	ドーハ(カタール)	2012年
COP19/CMP9	ワルシャワ(ポーランド)	2013年
COP20/CMP10	リマ(ペルー)	2014年

17 Voice

アフリカと共に

カメラマン

久野武志



初めてのアフリカ。あまりに暑いので、ナイル川で地元の人と一緒に水浴びをした(1997年、スーダン)

アフリカに関わり出してから、18年の月日が流れた。高校の授業で使った世界地図を持ち、アフリカに向かったのは大学生の時。まずは船で中国に渡り、ヒッチハイクや自転車やとどろり着いたアフリカは、ただただ、大きかった。「アフリカの水を飲んだ者はアフリカに帰る」。誰かが言ったこの言葉は本場で、その時ナイル川の水がぶがぶ飲んでいた僕は今、1年の大半をアフリカで過ごしている。なぜアフリカだったのか。それはもう直感だった。景色や文化よりも引かれたのは人だ。「ここで仕事したい」と思った。写真のことなど何一つ知らなかったが、3万円の中古カメラを買ってきて、僕は「カメラマン」になった。アフリカの人々と向かい合い、共に生きていくための

方法は何かと考えたら、これ以外になかった。

これまで、さまざまな国でさまざまなことがあった。戦時下のリベリアのジャングルで病気になる、生きるのを諦めかけていた時、兵士がおんぶして歩いてくれた。憧れの冒険家、上温湯隆氏の軌跡を探し、マリ

の砂漠をラクダでさまよったこともある。南アフリカでは3回も強盗に襲われたし、スーダンやソマリアでは投獄された。こ

れ以上に感動したり、うれしかったことの方が多からだ。

フリーランスの最大の利点であり魅力は、自分でテーマを決め、納得のいくまで仕事を続けられることだ。9年前、ケニアに移り住んですぐに、ハンセン病の人々の撮影に取り組ん



前線で負傷した兵士が運び込まれ、民間軍事会社の兵士が必死に緊急治療を施す(2012年、ソマリア、Kyodo News)

だ。「受け入れてもらえるだろうか?」「撮影できるだろうか?」。そんな不安を抱えていたが、それは現場ですぐに飛んだ。一般の人々からさげすまれ、疎外される彼らは、外国人の僕にとつともなく優しくなった。「あんたはうちの子もだよ。いつまでもいていいんだよ」。ある老夫婦はそう言うと、食べ物分けてくれた。他の人々も、患部を隠すこともせず、ありのままの生活を見せてくれた。生活費を稼ぐために街で物乞いをすると、自宅で出産するシーンも撮らせてくれた。人を撮影するとは、人の生活を知ること、すなわち

共に住むことだと知った僕は、結局半年近くも集落に住み込んだ。コンゴで反政府軍の撮影をした時も、南アフリカで不法移民の撮影をした時も、撮影する時はいつも、現地の人々と同じ場所で、同じものを食べ、同じところに眠る。人の心という、目に見えないものをどうやったら伝えることができるのか。いつもそんなことを考えながら、シャッターを切っている。

卵売りのあんちゃん、「シンジ・カガワ!」と笑いながらこちらを指差す若者、「Have peace」と拍手してくれる人もいる。ただそれだけなのに、彼らの言動はいつも僕の心の琴線にタッチする。

僕のコインには、いつもたくさんのコインが入っている。ナイロビの街で出会った物乞いの人々に渡すためだ。物乞いへの施しは、「彼らの自立心を奪い、結果的にダメにする」という考えもあると思うが、僕はこれまでアフリカに育てられ、多くの人々に助けられてきた。だからせめて、何かお返しをしたいのだ。コインはそのささやかな形の一つだと考えている。

毎朝ナイロビの街をランニングしていると、よく声を掛けられる。「よお、やってるな」と肩をたたいてく

る卵売りのあんちゃん、「シンジ・カガワ!」と笑いながらこちらを指差す若者、「Have peace」と拍手して

くれる人もいる。ただそれだけなのに、彼らの言動はいつも僕の心の琴線にタッチする。

僕はそのささやかな形の一つだと考えている。



人、景色、文化など、全てが美しいエチオピアは、お気に入りの国の一つだ(2012年)



治安は悪いが、住めば都だった大好きな街、ナイロビ(2013年)



朝食の前にいつも深い祈りを捧げるハンセン病の男性。共に暮らす中で、彼は僕を自分の子ども同然に扱ってくれた(2007年、ケニア)

<Profile>

くの・たけし

1974年愛知県出身。大学時代に中東、アフリカを旅し、世界の社会問題や矛盾に関心を持つ。卒業後、テレビ編集会社を経てフリーに。「戦争と人間性」を主なテーマに、アフリカを専門に取材を続けている。2007年上野彦馬・日本写真芸術学会奨励賞、2010年度愛知県芸術文化選奨文化新人賞。ケニア在住。

Uganda

[ウガンダ]

写真・文＝渋谷敦志（フォトジャーナリスト）

学びの明かり

夕日をバックに、屋外でダンスの練習をするウガンダの子どもたち。激しく腰を振る踊りは、チガンダダンスと呼ばれる



寺子屋の給食は、トウモロコシの粉を湯で練ったウガンダの国民食のポシヨ。一日にこの一食しか食べられない子もいる



普段は机を並べて読み書き計算などを学んでいる教室も、放課後になるとたちまちダンスルームに



[右上] 寺子屋から帰宅した後、まきを使う枯れ木を近所で拾い集めるサラ
[左上] 集めたまきで火をおこし、夕食の支度をする弟のセチムワニ
[下] サラが祖母と弟と暮らしていた借間。食事にも事欠く毎日で、家賃を5カ月滞納していた

ひとときわ小さい女の子が目にとまった。ナマクラ・サラ。当時7歳だった彼女はマラリアのせいで高熱を出し、汗を流しながら、必死に鉛筆の持ち方を練習していた。その姿が気になって、家について行くことにした。

1時間ほど歩くと、道端にポリタンクを持った子どもが立っていた。弟だという。学校に行かず、家事を手伝っている。2人は両親をHIV

／エイズで失った後、祖母に引き取られた。

蚊帳にこぎ、食器が転がる借間。電気も水道もない。祖母は時々採石場で仕事をしているが、「食料が尽きるのが怖い」と嘆いた。弟がまきで火をおこし、サラがお茶を沸かす。それが夕食だ。「砂糖はないけど」と出してくれた紅茶を手にし、言葉を失った。

力強い掛け声と躍動するステップ。驚いた。ウガンダで目にした子どもたちのダンスが、思いのほか本格的だったからだ。

5年前、首都カンパラ近郊の町ナサンナを訪れた。国際NGOあしながウガンダが運営するHIV／エイズ遺児のための寺子屋取材するためだ。そこで、放課後のクラブ活動

のようなものとして始まったのが、このダンスだった。

親を亡くし、貧しさから正規の小学校に通えない約60人が学ぶ寺子屋。「遺児にとって、学校に行くこと自体がチャレンジです」。そう話す担任のティディ先生もHIV／エイズ遺児だった。空腹、病氣、無気力、差別。彼らが戦う相手は多い。



2010年に初めて出会ったころのサラ。小学校低学年のクラスに保育園児がいるのかと思うほど小さかった



ナンサナから望む首都カンパラ。近年は車やバイクの交通量が急激に増え、いつも渋滞がひどい



叔母の洗濯の手伝いをするサラ。この5年で30センチも身長が伸び、病気にもなりにくくなった



水くみは子どもの仕事。1日2、3回も行う重労働だが、水場に集まった子ども同士で遊べる時間でもある



学校に行くサラと叔母の子どもたち。毎朝6時に起床、朝食を食べずに片道1時間半かけて通学する



水くみから帰ってきた後、自宅で算数の復習をするサラ。「もっと学びたい」。彼女にとっては、学び続けられることが最大の喜びだ

教育の一番の敵は貧困。そうティディ先生は言っていた。貧困から脱出するには、教育がカギなんだとも。でも、教育を受けられない子どもはどうすればいいのだろうか。そう思うと、将来の夢なんて簡単に聞けなくなつた。「あのころはいつもおなかがついていて眠れなかった」。そう振り返るサラは、もう11歳。弟と祖母は家賃が払えずに村に帰ったが、サラだけが近所に住んでいた叔母の家に残った。「勉強を続けてほしい」という祖母の願いに応え、正規の小学校への編入を果たした。

炊事洗濯。でも、眠れない夜は少なくなつた。何より勉強が好きだと目を輝かせる。「ジャーナリストになりたい。生活が苦しかったこと、お世話になった人のこと、忘れないうちに文章で書きたい」。いつもおなかをすかせていた女の子が、今では学ぶことに飢えている。それは未来をも照らす明かりだと、サラは気付いたのかもしれない。学びたいという意欲。これより他に意義のある投資先があるならば教えてほしい。ウガンダのエイズ遺児は約200万人。その中に明かりを渴望する子どもたちがまだまだいることを、忘れてはならない。



寺子屋で子どもたちを教えるティディ先生。「親、お金、食料。どれも足りないけれど、一番足りないのは愛情」と話す先生は、みんなの母親のような存在だ

再建が期待される
世界遺産といえ

ブガンダ歴代国王の墓



焼失前、ブガンダ歴代国王の墓は観光地としても人気だった（2009年撮影）

首都カンパラの西、カスピの丘にユネスコの世界遺産に登録された「カスピのブガンダ歴代国王の墓」がある。いや、正確にはあったと言いきらうか。2010年3月に焼失してしまったからだ。原因は放火とも言われているが、正確には分かっていない。

ブガンダとは、“ガンダ族の国”という意味。ガンダ族はウガンダで最大の人口を占める民族の一つだ。ブガンダ王国はイギリス植民地時代以前にこの地で栄え、ウガンダの独立後に消滅したが、いまだに部族の結び付きは強い。1993年には、政治的な力を持たない文化的なリーダーとして国王が復活し、ガンダ族の人々の心のよりどころになっている。

ブガンダ歴代国王の墓は、わらぶきのドーム型の屋根を持つ独特の形。19世紀にムテサ1世が宮殿として建てたもので、王の死後に墓所となり、1969年に死去したムテサ2世までの4人の王が埋葬されていた。焼失後は危機遺産に登録され、再建が期待されている。



墓の内部には歴代の王の写真や槍などが展示されていた



お土産として売られていたガンダ族の伝統工芸品

地球ギャラリー

ウガンダの文化を知ろう!

ウガンダ料理といえば
主食が満載のワンプレート

マトケ&牛肉の煮込み

首都カンパラで現地の人でにぎわう食堂に行くと、何やら何種類もの“具”が盛り付けられたお皿がどんと一つ出てくる。実はこれ、おかずはほとんどなく、主食ばかりだ。

ウガンダで典型的な主食の一つはマトケ。日本でよく食べられている黄色のバナナとは違い、皮が青くて甘くない調理用バナナを蒸したりゆでてからつぶして食べる。その味は、まるで味のないきんごんのよう。特に南部で人気の主食だ。

また、雑穀のミレットの粉をそばがきのようにお湯で練って作る茶色いカコ、トウモロコシの粉を使ったポショ、さらにはコメやイモまで一緒に食べることもあり、食卓はまさに炭水化物のオンパレードだ。

こうした主食にかけるとおいしいのが、砕いたピーナツを煮込んで作ったソース。ゆでた青菜とあえると、ゴマあえのようで日本人の口にも合う。おかずには野菜や肉、魚の煮込み料理が多い。どれも味付けは塩だけだったりシンプルで、素材本来の味が楽しめる。



© 渋谷敦志

[RECIPE]

●材料(4人前)

調理用バナナ4本／牛肉400g／タマネギ1個／トマト1個／塩・カレーパウダー少々

- 1 調理用バナナの皮をむき、ゆでたらねっとりとするまでつぶす。
- 2 鍋に油をひき、みじん切りにしたタマネギとトマトを炒め、塩とカレーパウダーで味付けをする。
- 3 ②に一口大に切った牛肉を入れて炒めたら、水を加えて煮込む。
- 4 ①と③を一緒に盛り付けたら出来上がり。

☆調理用バナナは皮のまま炭火で焼いても、ほくほくした食感でおいしい。



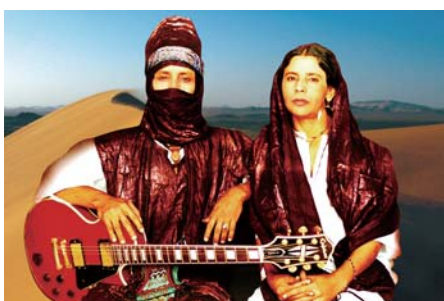
カンパラの市場で売られている調理用バナナ

イチオシ!

M OVIE

『トゥーマスト ～ギターとカラシニコフの狭間で～』

かつて青衣の遊牧民として、広大なサハラ砂漠を自由に行き来していたトゥアレグ族。しかしアフリカ各国が独立してからは、リビアやニジェールなどに分散して暮らすようになった。少数民族として差別を受け、苦しみと流浪の歴史の中、自由を求めて抵抗運動が始まる。“トゥーマスト”というバンドを率いるムーサも元戦士。今は武器をギターに持ち替え、音楽で世界を変えようと闘い続けている。激変する環境で生きる彼らの今を追ったドキュメンタリー。(文＝高倍宣義)



2010年／スイス／88分
監督：ドミニク・マルゴー
公開：2月28日(土)より渋谷アップリンク(東京)にて公開
URL：www.uplink.co.jp/toumast/
配給：アップリンク
TEL：03-6825-5503

E VENT

『小澤太一写真展「レト日和」』

世界中の子どもたちの撮影をライフワークとする写真家の小澤太一さんが、アフリカ南部の王国レトで撮影した作品の展示会が開かれる。平地が一切なく、世界で唯一、国土の全域が1,500メートルを超える高さに位置するユニークな国。山々に囲まれた国ならではの雄大な景色や、そこで暮らす人たちのありのままの姿を捉えた写真に、思わず引き込まれてしまう。2月11日(祝・水)に開催されるトークショーでは、世界各地を旅した小澤さんの貴重なエピソードが聞ける。

会期：2月10日(火)～20日(金) 10時半～19時(最終日は15時まで)
会場・問：コニカミノルタプラザ(東京都新宿区)
TEL：03-3225-5001
URL：www.konicaminolta.jp/plaza/schedule/2015february/gallery_c_150210.html

B OOK

『ブルネイでバドミントンばかりしていたら、なぜか王様と知り合いになった。』

人口約40万人、東南アジアの小さな国ブルネイに、日本大使館の職員として赴任した著者。「ブルネイと日本の懸け橋になりたい」と意気込んでいたものの、文化の違いにぶち当たり、政府の担当者からは事業を突然キャンセルされたりと、仕事は思うようにはいかない。そんな彼を救ったのは、中学時代から熱中していたバドミントン。ブルネイの国技でもあるバドミントンを通じて、一般市民から役人、さらには王室にまで人脈を広げていった。国境を超えた“スポーツ外交”で大きく人生を変えた下っ端外交官の奮闘記。



大河内博 著
集英社インターナショナル
1,728円(税込)

この本を
1人の方に
プレゼント
詳細は
38ページへ

B OOK

『マララ 教育のために立ち上がり、世界を変えた少女』

2014年、史上最年少でノーベル平和賞を受賞したマララ・ユスフザイさん。幼いころから教育の大切さを感じて学校に通い続け、15歳の時、イスラム武装勢力タリバンの銃撃を受ける。奇跡的に一命を取り留めた今、全世界に子どもの教育の大切さを訴えている。テロの恐怖に脅かされていたパキスタンで、彼女はどんな幼少時代を過ごしたのか。そして、自らが声を上げようと立ち上がったその理由とは一。本書は、貴重な写真や資料とともに、マララさん自身が初めて書き下ろした知られざる少女の物語。



マララ・ユスフザイ、
パトリシア・マコーミック 著
道傳愛子 訳
岩崎書店
1,836円(税込)

この本を
1人の方に
プレゼント
詳細は
38ページへ

読者の声

「11月号特集「国に平和を、人々に光を」を読んで」

■世界に目を向ける。それは難しいことを伝える必要はないのだと、「世界とつながる教室」を拝読して思った。最も身近な食から世界を知り感じること。授業を通してこんなことを学べるのは素晴らしいし、そのことで世界平和のために尽力したい人も多く出てくると思う。

(愛知県／女性／66歳)

■開発途上国でも原爆展をしていることに驚きました。原爆によって外国の人がこれだけ学べるのであれば、日本人はもつと、ヒロシマ、ナガサキについて知るべきだと痛感しました。

(新潟県／男性／29歳)

「12月号特集「貧しさからの脱却」を読んで」

■「世界で1日1・25ドル未満で生活する人約10億人」は、インバクトのあるタイトルと世界地図の貧困の分布データでした。世界と日本の中の貧困に目と心を向け、1・25ドルを使う時に痛みを持って自分の生活を振り返っていきたいと思いました。

(岩手県／女性／55歳)

■この雑誌を読んで初めて、マイクロファイナンスという貧困削減の1つの方法を知ることができました。ありがとうございます。私自身も、今後大学に進学する上で、貧困削減のためにはどうしたらよいか考え、社会人になって、たどり着いた答えを実行できるよう準備していこうと思いました。

(長野県／女性／17歳)

■貧困の開発途上国の人々に、太陽光発電・蓄電池・LED照明で、せめて明るい夜を過ごしていただきたいものです。

(神奈川県／男性／81歳)

本誌へのご意見・ご感想や
JICAへのご質問を
お寄せください。

プレゼント
付き

添付のアンケートはがき、Eメール、FAXから、本誌に対するご意見やご感想、またJICAへのご質問を、氏名・住所・電話番号・職業・年齢・性別・ご希望のプレゼントを明記の上、お送りください。ご記入いただいた個人情報は統計処理およびプレゼント発送以外の目的で使用いたしません。当選者の発表は発送をもってかえさせていただきます。

◎応募締切：2015年3月15日

Eメール：jica@idj.co.jp
FAX：03-3221-5584(『mundi』編集部宛)

- ① モンゴルの刺しゅう製品
- ② 書籍『ブルネイでバドミントンばかりしていたら、なぜか王様と知り合いになった。』(p37参照)
- ③ 書籍『マララ 教育のために立ち上がり、世界を変えた少女』(p37参照)



①



②



③

本誌をご希望の場合は
下記方法で
お申し込みください。

申込方法

本誌をご希望の方には、送料をご負担いただく形でご送付いたします。巻末の払込取扱票に、氏名・住所・電話番号・ご希望の送付期間・送付開始月を明記の上、指定の金額を郵便局でお支払いください。入金の確認後、発送手配をいたします(入金から1週間程度かかることもありますのでご了承ください)。複数冊、またはバックナンバーをご希望の方は送料が異なりますので、下記までお問い合わせください。

申込先 (株)国際開発ジャーナル社 総務部(発送代行)
住所 〒102-0083 東京都千代田区麹町3-2-4 麹町HFビル9F
TEL 03-3221-5583
FAX 03-3221-5584
Eメール order@idj.co.jp



次号予告 (2015年3月1日発行予定)

大洋州

広い空、真っ青な海。そんなイメージが強い大洋州の国々だが、実はそこには“楽園ではない”現実がある。5月に福島県いわき市で開催される「第7回太平洋・島サミット」に向けて、同じ島国としての強みを生かした日本の国際協力を紹介します。

<訂正とお詫び：2015年1月号 4ページ>
写真キャプション：(誤) マラウイ／(正) グアテマラ、プロフィール：(誤) ニカラグア／(正) グアテマラ
ここに訂正し、お詫び申し上げます。

mundi

FEBRUARY 2015 No.17

編集・発行／独立行政法人 国際協力機構 Japan International Cooperation Agency : JICA

〒102-8012 東京都千代田区二番町5-25 二番町センタービル
TEL : 03-5226-9781 FAX : 03-5226-6396 URL : http://www.jica.go.jp/
バックナンバーはJICAホームページ (http://www.jica.go.jp/publication/mundi) でご覧いただけます。
本誌掲載の記事、写真、イラストなどの無断転載を禁じます。



© Yuki Asada

カラフルな刺しゅうで収入アップ!

さんさん
燦々と照り付ける太陽に向かって、ナツメヤシ、オリーブなどの木々が勢いよく伸びている。「やあ!」「元気にやっているかい?」。行き交う人たちのほとんどが顔見知り。そのせいか、町中はいつものんびりと明るい雰囲気が漂っている。

ここは、広大なサハラ砂漠の中の小さなオアシスに広がるグルミマ。モロッコの首都ラバトから南東に約550キロ、人口2万人に満たないこの町で暮らす人々の多くは、北アフリカの先住民のベルベル人だ。目を引くのが、女性たちが伝統衣装として身にまとっている黒い布。レーヨン生地に施された色鮮やかな花の刺しゅうは、彼女たちの手縫いだ。

首都から遠く、山脈を隔てて自然環境

も厳しい町。人々の生活も、決して豊かとはいえない。本来であれば“稼げる”レベルの技術が、趣味程度にとどまっているのはもったいない。青年海外協力隊の大竹更あらたさんが女性たちに声を掛け、伝統技術の商品化が始まった。

パッと見ると美しい刺しゅうも、売るとなれば別の話。「より良いミシンの掛け方や型紙の使い方などを提案しています。少しずつですが、商品の“質”に対する意識が変わってきています」と、大竹さんは期待を込める。

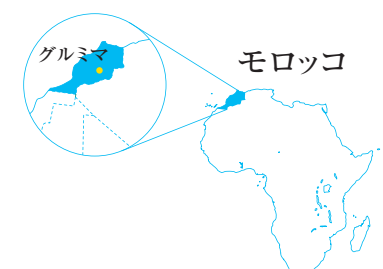
ポシェットやランチョンマット、ベッドカバーまで種類もさまざま。世界に一つしかない、お気に入りの刺しゅうを見つけてみてはいかが。



手先が器用な女性たちの刺しゅうのきめ細やかな美しさに心奪われる

★刺しゅう製品を5人にプレゼント!
→詳細は38ページへ

★モロッコ手芸フェアトレードサイト
(www.theanou.com:英語)を通じて一部購入可能。



お笑いで社会問題を伝えたい

お笑い芸人 **たかまつ なな**

TAKAMATSU Nana



PROFILE

1993年神奈川県出身。曾祖父は東京大学名誉教授で応用化学者の高松豊吉。中学・高校時代に読売新聞子ども記者団として活躍。第14代高校生平和大使として国際連合軍縮会議などに出席。現在、慶應義塾大学在学中。2013年「ワラちゃん！〜U-20お笑い日本一決定戦〜」優勝。「なんとかしなきゃ！プロジェクト」メンバー。

小学4年生の時にアルピニストの野口健さんの環境学校に参加して、富士山周辺の自然の美しさに感動しました。でも次の日、野口さんが「ごみ拾いに行こう」と言うのです。少し歩くとバスやトラック、注射針などの医療器具が放置されていて…。ショックでした。「見て見ぬふりをする大人が多い。だから、君たち子どもが伝えてほしい」と言われて、学校で壁新聞を作ったりしたのですが、あまり読んでもらえませんでした。

無関心な人を引き付けるにはどうしたらいいんだろう。ずっとそう考えていて、出会ったのがお笑いでした。中学の時に所属していたお笑いクラブの顧問が英語の先生で、校内の英語スピーチコンテストの余興として漫才をやることになったんです。すると、みんなスピーチは全く聞かないのに、私のネタになるとおなかを抱えて笑ってくれて。お笑いの力を実感しました。そのうち、「お笑いを通じて社会問題を伝える」が、私の夢になりました。

大学に入ってお笑い芸人になって、昨年ついにその夢の一步を踏み出すチャンス

が訪れました。日本の国際協力を紹介するテレビ番組で、バングラデシュを取材することになったのです。いわゆる開発途上国に行くのは初めてで、不安と期待を抱えながら現地に飛びました。

最初に訪問したのが、青年海外協力隊員の方の活動です。感染症の予防のための啓発活動をされていたのですが、いつも笑顔を決やらず、現地の人にも愛されているのが目に見えて分かりました。でも別の病院に行った時に、現地のスタッフを真剣に怒ったりもして。ちゃんと考えて薬を出さないと、きちんとした効果が出ないよと。信頼関係が成り立っているからこそ、言えることなのだと胸を打たれました。

児童労働をなくそうと活動している日本のNGOの取材では、現地の子どもたちに会うことができました。学校に行けず、家のお手伝いに懸命に取り組んでいる子がたくさんいる。知識では知っていたけれど、初めてそれが現実なんだと実感しました。今ここで私ができることはなんだろうと考えて、ベンガル語を少し覚えて手品を披露しました。私のネタでみんなの笑顔を

見ることができて、とてもうれしかったです。

帰国後、その番組の放送がちょうど大学の授業中だったので、ゼミの仲間と一緒に見ることができました。終わった後は、みんなでできることを考えたりして、とても有意義な時間でした。教職の授業では、模擬授業の素材にも使って大好評でした。やっぱり何をするにも、自分の目で見て触れて感じたことを伝えるのが、一番良いのだと実感しています。

今回の訪問について、お笑いを通じてもっとたくさんの方に発信できるよう、ネタを考えているところです。もっといろいろな国に足を運び、「楽しく分かりやすく」社会問題を伝えることを目指して、勉強していきたいと思っています。

「なんとかしなきゃ！プロジェクト」は、開発途上国の現状について知り、一人一人ができる国際協力を推進していく市民参加型プロジェクトです。ウェブサイトやFacebookの専用ページを通じて、さまざまな国際協力の情報を発信していきます。

なんとかしなきゃ で 検索